

---

# Absolute Wall-絶対の壁-

TOMSON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Absolute Wall - 絶対の壁 -

### 【Nコード】

N1552F

### 【作者名】

TOMSON

### 【あらすじ】

2人の親友が異世界に迷い込み世界を救うとかなんとか・まあ良くある話である銃を使い、活躍したり凹んだりとノリで進む2人の姿を描くオリジナルストーリーです

## プロローグ（前書き）

この小説は初作品です。期待すると痛い目に遭うよう！

## プロローグ

absolute wall - 絶対の壁 -

A

この変な物語はアホが無知恵と妄想によって成り立つフィクションチクショウである

この 1 枚目のところまで繋げられるか、いやむりだろう  
そこまでいくのに 50 枚いるんじゃないか？と俺は怯えつつなんとなく書いている

ようは暇つぶしである。それではその問題の 1 ページからご覧ください。

追記：むりでした（笑）

「しゅん・・・すけ・・・わりい・・・さきにいつてるわ・・・」

なぜこうなってしまったのだろうか、辺りは血で、人で、銃で、瓦礫で埋め尽くされている。

「こう・・・すけ・・・なんで・・・なんでだよ・・・なんでなんだあ

！！！！！」

右肩にあるバレット M82 を地面に落とした

「・・・・・・・・！！！！！！！！！！」

どこからか遠くで声がきこえる。視界が揺れる。

何も聞きたくない・・・なにも考えたくない・・・

左手にある親友の重みも 冷たくなった体温もなにも心に入っていない

「はは・・・」

「はははは・・・」

彼の中で人としての大事な部分がなくなつた気がした

なぜなら、

彼の前には絶望しかなかったのだから・・・

## 第1章 第1話：異世界への扉

キーン コーン カーン コーン

「やつとおわったあー！なあ俊介この後どうする？Cいつとくか？  
Bが いいか？」

彼は最近流行りの略語を使い出したらしいが間違っている。例えばCはカラオケ、Bはボーリングのことらしい。すべてノリであふおな事を一緒にやってきた俺の親友いや、悪友ともいえるべき野郎、さいとう けいすけ齊藤浩介だ。

ちなみに言うが、俺の名前は相沢俊介だ。あいざわ しゅんすけ親同士が学生の頃からの親友らしく同じ1字を子供の名前に入れようっていうノリで介が同じらしい

物心つき始めた頃から浩介とずっと一緒にノリだけで生きてきた。  
今思えば遺伝だったのかも・・・と思ってくる。

「おお、良いな！両方ハシゴするか！」

「そうこなくっちゃな！ついでにナンパでもして楽しくわいわいするぜ」

「ナンパて・・・お前そんな勇氣あったの・・・」

ふと何か視線を感じ、その方向を見ると女の子が本を読んでいた

「ん？何見て・・・ああ、藤咲がお前のタイプだったのか まあ悪いことはいわない、やめておけ」

「そんなんじゃないよ！ただ・・・なんていうか・・・」

「なんだよ？照れてんのか？たしかに美人だよなあ」

「ちげーよ　ってかなんでやめとけ　なんだ？」

「お前しらねえの？あいつ肩に弾痕みたいなのがあるって噂だぜ？」

「は？だんこん？」

「銃で撃たれた跡のことだよ」

「そんくれーわかるわ！タバコの跡でもなく？」

それはそれで問題だが・・・

「しらねえよ　でもそんな噂があるってことだ。藤咲も無口で無表情だしな、まあ関わらないに越したことはないだろ？美人だけ・・・園芸部だけど・・・もったいないけど・・・」

「結局お前のタイプじゃないか！園芸部関係ないし！！」

「そーだよ」

「軽っ！あっさり認めた」

「お前が目つけてたからそーゆー噂流してんじゃない？」

「なるほど、その手があったか！！待てよ・・・その理由できっとそ

んな噂がたつたにちがない!!!」

ないだろう。そんなこと考えるのはお前だけだ　と突っ込み入れた  
かったが彼が言った一言で考えはかわった。

「明日プールの時間、覗こう!!これしかない!!!」

「たまには良い事いうじゃねーか」

「だろ?だろ?」

「ああ・・・明日楽しみだ」

ワタシたちハ ケンゼンナ コウコウセイ デス  
ジュギョウチュウ タノシミデ モチロン ベンキョウドコロデハ  
ナカッタ

こそこそ・・・カサカサ・・・

「イテッ」

「シーー!!」

両手を合わせ頭を下げる。ここは某楽園の真裏 茂みの中だ

なにやら楽しそうな声が聞こえる



「えー？そーかなあ？」

「絶対そーだって！谷先輩が沙希のこと目で追ってたもん」

「なんか最近むねの辺りがきつくってさー」

「いいなー成長して・・・私なんか・・・クスン。。。」

「おおー キタコレキタコレ！これぞ青春のTHE夏祭りだ！」

「ついついはしゃいでしまう 男だもの・・・」

「おい、あんま大きな声だすなよ バレたら終わるぞ」

「とかいいつつ壁に耳あててんじゃん いやぁ地球に生まれてよかったぁー！！！」

ガラッ

「！！！！！！！」

「！！！！！！！」

なにか聞こえてほしくない音が頭上で聞こえた。

「死にたくなかったらどこか行きなさい」

女の子にしては低いけど通る声 カッコイイ声だった。  
つい俺は聞き入ってしまった。

「聞いているのか」

ハッ！隣をみると相方は消えていた。再び視界を上に向ける前に・  
・ダーーーーーッシュ！

「はあはあ・・・やべえ・・・終わった・・・はあはあ・・・」

彼はこの高校に入学して1年と数ヶ月、高校生活半ばで終わりを感  
じた。

プーン バチン プーン バチン

ここは体育倉庫の裏の草地。蚊が多いことで有名。

「くっそー！なんでこんなところで蚊と格闘せねばならん！」

うん。自業自得だね。

「しかし、浩介はどこいったんだ？まさか捕まったのだろうか・・・  
」

ヴィーン ヴィーン ビクッ

なにビクついてんだ俺。。しつかりしろ！俺！！！！  
たかが携帯のバイブじゃないか！

「さてっと メールか、、、あいつからか、とりあえず生きてた  
な。」

拝啓 俊介様へ

いかがお過ごしでしょうか。

僕は元気でやっています。

夏休みまで後10日

暑いでしょうけどお互いがんばりましょう。

「んん???どしたんだ浩介の奴?おかしくなったのか???」

P S . 教室って涼しいし快適だなあ がんばって逃げ延びてくれ。

あなたの親友より愛をこめて・・・

敬具

なんともいえない怒りがこみ上げてくる

「ああ、殺人者ってこんな気持ちなのかな・・・」

とつぶやきながら携帯を握り締めた ミシッと鳴った

気持ち的には壊すくらいの勢いだっ たけどそんな力はなかったようだ

「俺・・・なにやってんだろ・・・」

と、小さくつぶやいた。

終礼が終わり校舎は帰宅部や部活動の人たちであふれていた

「いやあ悪い悪い まさか覗く前にバレるとはなあ」

全くといっていいほど悪びれる態度ではなかった それが余計に殺意を沸かせる

「えーっと・・・とりあえずその拳下ろしてくれると有難いんだけど・・・」

「なぜ逃げた」

「本能というか・・・ねえ？」

通行人A「え？」

「みる！この蚊との戦いに敗れた手足を！」

「フッフ・・・そーおもって・・・ジャーン！ウナ ーワだ！しかもモロ シタイプだ！！」

「おお、さっすがー！ってちっげーよつつつ！！！」

「ってかな、全くと言っていいほどなんの騒ぎにもなってなかったぞ？」

「へ？まじで？」

「うん。ところで誰がでてきたんだ？」

「お前・・・それすら見てなかったのか・・・」

「そりゃーもう、生贄捧げて顔隠してダッシュでそれどころじゃ・  
・ねえ・・また手が上がって・・」

鈍い音がした。

「誰が教えるかコノヤロー！」

しかし、なぜ藤咲は誰にも言わなかったのだろか。それにあの言葉・  
・死にたくなかったら・・か。

「と・・とりあえず今日はKいくぞー！服欲しい！！」

「いかねえ！そんな気分じゃない」

「まだ怒ってるのかあ？このコブに免じて許せてー・・・」

「ああ、そのことはもういい、ただちよつと・・なあ」

「ちえ んじゃ貴志でも誘ってみるかあ またなあ」

「ああ、またな」

夕方にはちよつと早いいつもの帰り道。とくに何があるわけでもな  
く今日の出来事に

ついて考えながら帰っていた。ふと視界の端になにかが入り込んだ。

「ん？藤咲か・・・あんな道端でなにを・・・」

「The different world open」

彼女がそう言うのと目に前に光が集まり2mくらいの穴を作り出した。  
そして彼女は中へと消えていった。

「な・・・」

さっき目の前で起こったことに思考が追いつかない。  
見ていたはずなのに、信じることができない。

ハッ！

「アブダクション！？宇宙人！？きちやった！？どうする！アイ  
ル」

鈍い音がした。

「あぶねえ・・・もう少しでいってしまつた・・・さて、ど  
うしたものか・・・」

彼女がいた場所に、彼女が消えた場所にゆっくり近づく

「な・・・なんてことねえ 俺も消えたら消えたでいい いいのか？  
よくないけどいいはず。」

まだ動揺はあるけど恐る恐る消えた場所に立った

「だろうな うん。なんもないとおもつたぜ。ふう」

しばらくソコに立ってみただけ何が起こるわけもなく思考をめぐら  
せる。

「たしか藤崎がなんか言ってたんよなあ。ってことは自分で穴だして入ったってことか。なんたらわーるど　おーぷんだったよなあ．．英語もつと習えばよかったな。」

頭の悪さを後悔しつつ　聞いたことある単語だとはすぐに分かった

「まてよ？わーるどは世界　おーぷんは開く　なんかの世界を開いたってこと．．？なんの世界だろ．．いやいや、ゝゝゝでも実際藤咲は消えたわけで．．．ってことはなんかの世界に行ったわけで．．だからなんの世界だ？思い出せ俺！なにを言っていたのかを」

あ？ちがうな．．濁点てきな１文字が始まりだったな．．．がぎぐげご．．ざじ．．．ざ？

「ざ　か！Theだ！何たらワールド．．違う世界とかそんな意味だとは思っけど．．あ、そーだ！このご時勢に便利なものがあるじゃないか！けいたいでんわぁゝ（棒青狸風）」

突っ込み誰か入れてほしかったな　と心の中でつぶやき、それらしき言葉をひたすら翻訳してみた。

おもしろい世界　変な世界　すごい世界　楽しい世界　異なる世界．．ん？これ．．

「ぼいな！見つけたくなかったけど！！しかし．．．」

新たに壁が彼を襲った。そう、彼は読めなかったのだ。

「しょうがない、あいつに電話だ」

ピピッ　コールの変わりに歌が流れる

「おう！どうした？やっぱKに行きたくなつたのか？」

雑音がひどい

「とりあえずうるさいから店からでてくれ」

少しして雑音がちいさくなつた

「で、なんだ？」

「ディーアイエフエフイーアールイーエヌティー　ってなんて読むんだ？」

「ディファレント　異なる　違う　って意味だな」

即答された。やつは頭だけはいいのだ。

なんかむかつく

プツ　　ツーツーツー

「なんだつたんだ？まあいいか」

「さて、わかつたはいいものの・・・異なる世界を開く　か・・・」  
空気が冷たくなつた気がした



「なーんかやばそうな雰囲気だな・・・よっし！漢俊介！<sup>おとこ</sup>覚悟きめて言いますか！」

「ザ ディファレントワールド オープン！」  
シーン・・・

「あれ？やっぱ無理？それとも発音か？」

どこかで鈴のような音がした

小さな光が1つ また1つと次々に現れた

「あ・・・正解しちゃったっぽい・・・光が集まっていく・・・」

大きくなつた光の真ん中に穴が開き徐々に広がっていく

「・・・穴だ・・・でも・・・なんか・・・ちっさ！・・・！」

直径50cmほどで穴は留まり何かを待つように浮いている

「ど・・・どうしよう！！そっだ、京都に行こう。いやおちつけ俺、ココまで来たらいくしかないじゃないか！もしかしたら藤咲の肩の傷と関係あるかもしれないじゃないか」

いや、実際見てないんだけどね・・・

そっこうしてるうちに光の周りから崩れていく

「やべえ消えちゃう、行くしかないな！やっぱノリ大事だ 穴だつて俺を待っているんだ！世界の彼方へ さあ ゆくぞ」

一気に頭からタイプし穴へと入り込んだ

穴は彼とともに消えてしまった

その日激しく雨が降った

## 第2話：不審者

「3番隊ハクル部隊長から2番隊シアン部隊長に連絡！2・5エリアにて至急応援求む！」

「了解」

「2番隊いくよー！死んだら殺すからなー！！」

その声に応えるかのごとく6名の声が一斉に響いた

『おっ』

ここは2・1～2・8の地区を守る正規軍第2軍管轄のベースキャンプと言われるところだ。

各部隊8名構成で約80名の防衛軍がいる。そこに工作員、衛生兵などを加えると倍近い人数がここを家とし戦っている。

基本構成の部隊はSR兵2名AR6名となっている。もちろん部隊長も含まれる。

彼ら彼女らはBOSS（1～30のエリア各1名ずつの指揮官）の命令により戦うのだ。が、2エリアは指揮官の指示により、状況によって部隊長の判断で動くことが多々ある。

「8・c5から援護するから3・3左右展開であいつらに貸しつくってやんな」

『了解』

返事すると同時に6名は一斉に駆け出した

「ハクル隊長！左右正面と囲まれています！」

「わかつている！応援はまだか！！狙撃兵はなにしている！！！」  
「ポットは・・・私も腕を撃たれて狙いが定まりません」  
「このままじゃ全滅の可能性が・・・」  
「まずいな 応援はまだか！」

ターン                      ターン                      ターン

「左空けたよ さつさと逃げて来い援護すつから 貸し10だから  
なあ」  
「ちっシアンか よりにもよって・・・しかも10て多いぞ！それに遅い」  
「ったく。休日返上してわざわざ来てやったのに だからハクルき  
らあーい」

「シアン隊長7-c5に狙撃兵が複数います！そちらお願いします  
！」  
「ルナ、怪我でもしたの？あんなの・・・あんだ・・・なら楽勝・・・  
じゃないつとクリア」  
「しゃべりながら3名を狙撃した」  
「ちよつと腕をね ライズさんに手当てしてもらわないと」  
「治ったらクッキー焼いてもらっからね」  
「りょーかい」

「3番隊より2番隊へ 撤退完了」  
「あいよーごくろうさん 帰って飲みなおそうか・・・ん？なんか  
いる」

スコープで捕らえたのは頭おさえて悶えている男だった

ドサッ

「いつてー」

そんな銃弾飛び交う中に頭からダイブしてしまったやつがいた

「あの穴野郎め、こんど会ったらただじゃおかねー……どこだここ？」

背中に汗がにじみ出る。テレビで聞いたことのある嫌あゝな音が頻繁にきこえてくる

「銃撃戦……？ まっさかあゝねえ？

うおっ」

パンパン

彼の足元に2つの穴ができていた

「ちょ……まじっすか!？」

といいながら近くにあった瓦礫の隙間にスライディングよろしく滑り込んだ。甲子園球児もびつくりのみごとなスライディングだった

「はあはあ……なんだよ……ありえねえ……」

男らしき人が3名銃を構えてこちらを伺っている。まるでライオンが獲物を捕らえるかのごとくこちらを狙っていた

「う……撃たないでくれー!!!」

彼なりに必死で叫んだ

「怪しい者じゃない! 武器なんてもってないただの高校生だよー! へ……へるぷみ」

3名は顔を見合わせなにやら携帯のような物にしゃべっている

「そのコウコウセイ 軍名と所属部隊名を言え！」

「いや・・えーっと・・高校生だから・・その・・」

「スパイか！？5秒以内に言え さもないと射殺する」

「ちょ！軍とか知らないし いま来たばっかでなにも知らない 撃たないでくれえー」

またなにやら携帯らしきもので話 お互いにうなずき1人が前へで  
てきた

「コウコウセイ 頭に手を乗せて出て来い へたな真似をしたら撃  
つ！」

ちょ・・マジ怖いんですけど

「とかいって絶対撃つ気だ・・俺本当にスパイでもなんでもない  
一般市民なんだよお」

ええ、チビってますとも・・

「さっさとしろっ！本当に撃つぞ！！」

終わった・・世間体の終わりとかじゃなくて本気で終わった・・  
と思いつつ出ることを決意した

「今出ます！すぐ出ます！もうこの際撃たれてもいい！！！」

やけくその間違いだった

「ポール なんかに変なのがそこに出てきたぞ」

ポール率いるリック、アイラ3名が左展開していた付近に急に男が  
出てきたのだ

「武器などもっていないさそうだな 抵抗しなければ捕獲 注意して

「かれ」

「了解」

「なんだあの格好は・・・」

「とてもこんなところにくる格好ではないな こけてるし」

「スパイっぽくないけど・・・威嚇射撃してみよっか？」

しばらくリックは考えたが どころなくまぬけな顔を見て危険ではなさそうだと判断した

「アイラ・・・あてるなよ？」

「ちょ そこまでヘタじゃないっ」

パンパン

「お、隠れるのはやつ」

「逃げ慣れているのかしら」

「う・・・撃たないでくれー！！！」

「怪しい者じゃない！武器なんてもってないただの高校生だよー！  
！へ・・・へるぷみ」

「だつてさ」

「コウコウセイ・・・名前か」

リックは無線を手元に取った

「隊長 名前はコウコウセイ みたところ怪しいですが危険はない  
ようです」

「ふむ 逃げ足だけははやそうだな」

「ええ、早かったです 捕らえますか？」

「一応所属聞いてみてからだな」

「了解」

「どうやら一般市民らしいです　なぜこんなところに来たのかは不明ですが」

「そうか。ならば捕獲しろ　ただしベースには目隠しさせて連れてきて」

「了解」

「さっさと捕まえて帰ろうよ」

「だな」

「まだ若そうだね　まぬけな顔だけど」  
「たしかにな」

こうして俊介の最悪な人生が始まった。いや、終わったのかもしれない。

「ボス　2番3番部隊無事撤退完了です」

彼女の補佐官ヒュリスは悲しそうな顔をした

「無事だったみたいですね」

「狙撃兵ポットが・・殉職です」

「そう・・・残念ね　本部に連絡して1人来るよう要請しておきます」

「了解。　あ、それと1名捕虜としてつれて帰ったそうです」

「捕虜？インガ軍？」

「いえ、なんか一般市民らしいのですが変な服装らしいです。　いまからシアン部隊長が尋問するらしいです」

「そう　詳しいことがわかったら連絡ください」

「了解　失礼します。」



敬礼をして部屋から出て行った

「変な服装・・・か まさか・・・ね」

「尋問拷問わつしよいわつしよい」

酒瓶片手にスキップしながら小部屋に向かう。

「シアン隊長・・・飲みすぎですよ」

「休日に飲んで何が悪いのお？」

頬を膨らませて口を尖らせる

「まあいいですけど・・・そんなので尋問できるんですか」

「できる！」

と、満面の笑みで親指を立てた

「そうだ、何かわかったらボスに知らせてください」

「あいよー！さあーってと、いつちょ口を割らせますか」

そういうとシアンは部屋に入っていた

「なんか・・・がんばれ不審者よ・・・」

「なんか座らせられたけど・・・ここどこだろ・・・」と心でつぶやいた

ココにくるまでに目隠しされ口にテープ、手錠された状態で来た。

椅子にすわらされた時に目隠しだけは取ってもらえた。周りには机と棚と窓1つしかない5畳くらいの狭い部屋だった。コンクリートでできているのだろう、室内は冷たい空気で淀んでいた。

ところどころ黒いシミがあったのだが極力意識しないように必死で「あれはきつと・・・ソースこぼしたんだ・・・きつと焼きそば好きの人が住んでる部屋なんだ」と言い聞かせていた。

ガチャリ

「ちーっす 元気いゝ？」

!!!

髪は赤で肩まで、黒のＴシャツに短パン、そこそこ豊かな胸で、顔はどこか猫のような雰囲気を持っていた。そう、猫耳しっぽなんかあるとイチコロだろう。。。

「えーっと・・なんだっけなあ・・・そうそうコウゴウセイだっけ？」

まで、  
いろいろおかしい気がするぞ！！

「むう　しゃべらないと撃っちゃうぞ」

もちろん口にテープが貼ってありしゃべれるわけがない

コッソリ　　と頭に冷たいものがあてられた

「ほーら 本当に撃つちやうぞ」

「  
ん  
”  
|  
|  
|  
!  
ん  
”  
|  
|  
|  
!  
!  
」

俊介は必死でテープの存在を訴えようと呻いた

ガチャリ

「シアン」報告書とペン忘れてる・・・ちよつと!!」

白色のＴシャツに黒のスパッツ  
髪は銀色で胸のあたりまで長く胸  
の膨らみも豊かで

西洋風のきれいな顔立ちの女の子が入ってきた。正直天使だとももった。

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ ? \\ \neg \end{matrix}$$

「なにやってんの！？いきなり殺す気！？」

天使は悪魔の獲物を取り上げた

「だってー・・・しゃべらないんだもん！なんか呻くだけだし・・・」  
本気でいつてるのかコイツ・・・

「テープはがさなきゃしゃべれる物もしゃべられないでしょ！」

「あらま うっかり」

舌をだして左手を頭に乗せる

「もう お酒はほどほどにしなさいってあれほどいったのに・・・」  
といいながらテープをはがした

「ぷはっ」

ま・・・まだ生きてた俺・・・ありがとう天使様

「大丈夫？なんか飲み物とってこようか？」

つと、部屋を出ようとする

「ま・・・まって！いらなから行かないでくれ！悪魔がここにいる限り」

半泣きですがりつく

「あはは それならシアンが持ってきたほうがいいね」

「んんん？よくわからないけど・・・まあ持って来てやるか」

なんか腑に落ちない顔で部屋を出て行った

「ふう・・・あの人大丈夫なの？絶対隔離したほうがいいとおもうんですけど」

悪魔がいなくなったことでとりあえず命の危険は脱出した

「シアンはお酒はいるとちよつとね」ところでコウコウセイ君聞きたいことあるんだけど素直に伝えてくれるかな」

「もちろんなんでも言います！殺されないのなら」

「よし 私は第2軍2番隊所属のアイラよ さっきのが2番隊のリーダーのシアン部隊長」

ため息と共に肩を落とした

「あれがリーダーなのか・・・世も末なのか・・・」

ハッ！ リーダーを馬鹿にしたらすすがに怒るんじゃないのか！？  
「あはは コウコウセイ君おもしろいね」

なんか・・・セーフ!! あ、名前いわなきや

「あの、俺の名前は俊介です」

「あれ? コウコウセイ・・・じゃないの?」

「高校生です 名前は俊介です」

あれ? なんかおかしい??

「んと、名前が俊介なのね? で、コウコウセイって・・・なに?」

やつぱり・・・ってことはこの世界には学校がないのか?

しばらく黙って考え事していると

「聞いてる? 俊介君」

ハッ!

「撃たないでー」

さすがの天使も怒らせた 撃たれると思った

「ちょ シアンと一緒にしないでよっ」

あ、怒った顔も天使だと思った。 うん俺おかしいな

「あ、すみません えーっと・・・高校生って言うのは・・・たぶんですけど学生ってのも知らないですよね?」

「ガクセイ・・・知らないわね 訓練生じゃなくて?」

「たぶんそれに近いものですね」

「そう それなら A R? S R?」

A R? S R? なんだろ・・・やつぱ英語まじめに受けるべきだったか・

「それって何でしょうか」

少し驚いた表情をした

「銃の訓練生じゃないの?」

日本にそんな文化はない あっても竹やりで戦えとかだった気がする

「ちがいます! 触ったことも見たことすらありません」

すると彼女は驚くどころか冷たい目で真剣な顔つきになった

「うそをつくのね?」

腰に手をやり、ナニ力を取り出そうとする

「ま・・・まって!! うそじゃないです! 本当です! 信じてください」

頭を机につけて訴えた

ガチャリ

「アイラ〜お酒しかなかった・・・おろ？撃っちゃダメだよアイラ！」

悪魔が天使に！？天使が悪魔に！？わけわからんけど誰でも良いからたすけてえ・・・

「だって嘘つくんだもん」

「本当ですつてば」

ため息を吐いて銃をしまった

「どうおもう？シアン」

「んー 嘘じゃないよ 私はそー思う」

と、いいながらお酒を差し出した

「まあのみなよ コウゴウセイ君」

「光合成じゃなくて高校生で名前は俊介です それでもって未成年です」

「・・・」

ニコっと笑顔を向けられた

「アイラ、めんどくさい 撃っちゃえ」

「えーーーーー!!!!!!」

「だってなにいつてんのかわかんないもん！」

めっちゃ日本語なのにどーいえばいいんだよ・・・

「そうだよね〜 あ、そういえばシアン 戻ってくるの遅かったけどなんかあったの？」

「んーっと・・・ああ！ボスがコウ・コイツに会うからそれまで生かせとけとかなんとか」

オイオイ ころす気満々だったじゃねーか！

「ボスが会うなんてめずらしいね」

「だね〜 コウなんとか！失礼な真似したら殺すからな」

目がマジだった

「は・・・はい！」

2人はそういい残して部屋から出て行った。そのおかげで少し気が楽になった気がした。

コン コン

「どうぞ」

「失礼します」

「シアンさん どうしましたか？捕虜の件？」

「そう コウゴウセイについてです」

「光合成??」

「コウゴウセイに飲み物あげてもいいかな？」

「えーっと・・・」

飲み物？光合成？植物でも育てているのかしら・・・？

「い・・・いいと思うわ でも水にきなさいね？」

「了解です。それじゃ」

出て行こうとする彼女をよびとめた

「よかつたらその植物？を見せてもらえるかしら？」

シアンは少し驚いた表情をした

「会うの？」

「ええ、こうみえても植物は好きですもの」

少し考えて

「よくわかんないけど会うなら一緒にいこー 万が一ってこともありえるからね なんか生意気だしね」

?? そんな危険な植物なのかしら・・・

「ええ、少ししたら行きますね。」

「了解 ではまたあとでね」

「この世界で植物に出会えるなんて思わなかったわ たのしみ」  
1人つぶやきながら書類に目を通す

「シアン部隊長ボスが呼んでいます」

若い兵が走って伝えにきてくれたようだ

「ん あんがとね」

さつき持っていた酒瓶とは違う瓶を持っていた。しかも半分ほど減っている

「アイラいくよー」

「はあい」

アイラも少し飲んだらしく頬がピンクに染まっている

「ボス こちらです」

小部屋まで案内をする

「ここで育てていたのね そんな危険なの？その植物は」

外からは見たことはあるけど中を見せてもらったことがなかった

「育てるとは？植物ってどういうことでしょうか？」

あれ？ちがうの？

「え？だってシアンさんが光合成がどうか・・・」

「シアン！コウゴウセイじゃなくてコウコウセイっていったでしょ！」

「あら あ、違う違うコウコウセイって聞いたのはボスに話した後だよ」

「待って！いまなんて！？」

突然今まで聴いたことないほどの大きな声に驚いた

「え・・・えとえと、、コウコウセイ と、それに名前は俊介だと・  
・言っていました」

どうゆうこと？コウコウセイって高校生のこと！？それに俊介って・  
・あの人！？

「なぜここに？この世界になぜ来ているの！？」

かなり動揺したのか声にでてしまった

「ボス！大丈夫ですか！？ライズさん呼びましょうか！？顔真つ青  
ですよ」

しばらく考え込んで

「だ・大丈夫。それよりも会わせてください」

会って本物なのか確かめないといけない　ファーザーは一体なにを  
考えて彼を呼んだの？

「それなら先に私たちが入りますので中からお呼びしますね」

といって2人は入っていった

しばらくしてドアが開き

「どうぞお入りください」

5秒ほど目を瞑り決意を固め、彼がいるであろう部屋に歩みだした  
「どうか彼ではありませんように・・・」

心から祈りながら



### 第3話：絶対の壁

2人が出て行ってから30分ほどたつたろうか

時計がないこの部屋で時間などわかるわけもなく、その間今日の出来事を思い返していた

「今日は散々だな・・・覗きがバレて、蚊と戦って、アイツ殴って、藤咲が消えて、英語に泣いて、光の穴がでて、頭から落ちて、銃で撃たれそうになって、ちびって、目隠しされて、天使なのか悪魔なのかわからん2人組みに殺されそうになって、放置プレイって」

「のどかわいたけど目の前には酒瓶そして手錠・・・なんてハプニングに充実した一日だ」

ために貯めた息を吐き出し机にうなだれた

「ついてない この言葉は俺のための言葉じゃないんだろうか・・・そろそろなんか良いことあってもいいとおもうんだけどなあ・・・」

「  
またため息をした瞬間に

ガチャリ

「おい コウなんとか！ボスが来たぞ！背筋のばせ！！」

というやいなや、背中を叩いた

「おっふ！  
　　いってえー！！」

「お、わりわり　まあ元気でよかった　飲んでないのか？せっかく持ってたのに」

ぜんぜん詫びる気がないようにだ

「の・・のめるかー！ー！！見る！この手を」

手錠の存在を全力で訴えた

「・・・・・・」

ニコッ

その笑顔は危険なことが起こる前触れなのは十分学習していた

「なんか・・すいません・・」

「わかればよろしい」

満足したようで安心した

「それじゃシアン、そろそろ呼ぶよ？」

「え？なにを??」

さすがにアイラも限界がきそうだった

手が少し震えていたのでマジ危ないと思い　こっそりシアンに教えた

「ボスって人のことじゃない？」

「あ、ああ！ボスでしょ？わ・・わかってるよー」

「ったく・・・・」

なんとか怒りを納めてくれたようだ・・とばかり受けたらたまっ

たものじゃない

「んじゃ呼んでくる」

そういうとドアを開けた

入ってきたのはどこか外国の軍服に似た服装、体形はすらっとして  
いて肌は白くちよっと寂しい膨らみを隠すように髪は黒で胸の辺り  
まで伸ばしていて、どこか見たことある顔

彼女は驚いているのか、泣きそうになっているのか、そんな顔を  
していた。

たぶん俺も似たような顔をしているだろう

そう、彼女は藤咲でボス 彼は俊介で不審者だったのだから

コン コン

「朝だよーおきろー！」

心地よい、とはいえない硬いベッドで寝ていた俺は中々寝付けなかった

そりゃあれだけいろいろあればベッドがふんわり羽根布団だとしても寝付けないだろう

「うーん・・・あと5時間・・・スー・スー」

再び睡魔さんに連れられてドリームランドに行こうとしていた時恐ろしい言葉を聞いた

「・・・そう それじゃーシアン呼んでくるしかないかなあ？」

し・・・あん・・・しあん・・・シアン！？睡魔さんが悪魔に変わる

「さああの世に行きましようねえーいいお酒あるよあー」

「ぎゃあああああああ」

がばっ！！ ほんの少しの間襲われた悪夢なのに汗だくになって

いた

「あははは やっぱおもしろいよ俊介君 よっぽどシアンが怖いのね」

ふと入り口みると腹を抱えて笑っているアイラがいた 可愛いね  
うん、俺おかしいな！

「冗談やめてくださいよアイラさん マジ寿命縮みますってば・・・

」

どことなくさっきの悪夢は消えて笑顔になっってしまう にやける  
の間違いかも

「シアンはすごくいい子なんだけどなあー一緒に戦えばわかる事だよあ」

戦うか・・・

「まあ・・・追々つてことで・・・で？」

「ん？」

2人の間に沈黙が流れた

「いや、起こされたからには何か用事なんじゃ・・・？」  
なにか思い出す仕草をして

「んー・・・あ、そうだった つい和んじやったね ボスからここ  
案内するように頼まれたんだけど出撃までに案内したかったら早め  
に起こしに来たの」

藤咲が頼んでくれたのか それに出撃・・・か

「帰ってきてからでもよかったのに」

少しさみしい顔をした どこか遠くを見ているような目で言った

「あのね・・・私たちに攻撃後の予定は決められないんだあ だっ  
て・・・」

しまった わかっていたのに・・・傷つけてしまった

「ごめん！その・・・気が利かないっていうか・・・その・・・とにかく  
ごめん！」

しつかりとそして力強い目でこつちをみて笑顔になる

「ううん。大丈夫だよ　だからね、なるべく心残り無い様に1秒1秒すごしたいんだあ」

「もちろんここにいる人全員同じ気持ちだよ　今日、明日に友達、家族、が死んでしまってもその悲しい気持ちを弾丸に込めて撃ち、戦争のない平和な国にするために　ね？」

なぜか自分のことの様に胸が熱くなってなにかが目から零れた

「ちよつと　なんで俊介君が泣くのよ・・・」

彼女も涙を流していた

「ごめん・・・」

昨日藤咲に聞かされた事を思い出してしまった　本当の事だといまさら理解した

そしてしばらく涙が枯れることはなかった

しばらく沈黙がながれた

お互いが何を言って良いのかわからない

シアンやアイラも2人の空気を読み取ったのかしゃべることができない　と、そのとき

サイレンのような音とともに机が小刻みにゆれだした

いや、机だけじゃない棚も、窓も、部屋全体が、世界が地震に襲われたと錯覚するほどに

「うお・・・じ・・・地震？あ・・・あぶ・・・いつてー！！」

手錠され椅子に座っていた俊介は揺れに対してバランスが保てなく盛大に倒れてしまった

「ちよつと 大丈夫！？」

藤咲が慌てて机の下をのぞき見る

「もう少しで終わるから・・・そのまま我慢して」

すると揺れは小さくなりやがて先ほどの沈黙が訪れた

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

そろそろ何かしゃべらないと・・・いや、起こしてもらうのが先決だ

「えーつと・・・そろそろ起こして欲しいんだけど・・・」

「あ、そ・・・そうね」

そついうと藤咲は駆け寄ってきたが

「ボス！安全の為私がやります」

とシアンが机に手をかけ 一気に引き起こした

とても女の子とは思えない力で、しかもかなり乱暴に起こされたので机に頭をうつた

「いでー！！乱暴すぎるぞコノヤロー！！」

半泣きで訴えた

「うつさい！折角起こしてやったのに礼の１つくらい言ってみろ」

「いえるかー！酒乱だし馬鹿力だし悪魔だし！！女の子なら心配の言葉とともにオデコにちゅーくらいしてみる！！いやこの際ちゅーだ

けでもいい！さあこい！！」

目を瞑り口を差し出してみた。冗談でも言わないとこの空気を変えれないと思った

本当にしてくれたら・・・なんて気持ちはなかった 否、して欲しかった かなり・・・

「しょうがないな」

え？マジっすか！？

アイラが心配そうにシアンを見るとアイラにむかってウインクをしたときどきして待っていると、目の前をなにか通ったような風がながれた

「はい ちゅう〜」

と、共に唇に冷たい、そして硬い感触 なにやら焦げ臭い

「おもったより唇硬いんだねえ〜ってコラッ！！」

ええ、銃でした

「お味はどう？なんなら舌も入れてあげようか？」

笑いを含んだ声、いや完全に笑っていた まるでいたずらっ子のような笑みだった

「それって弾じゃん！！死ぬじゃん！！！！」

また訴えようと口を開きかけた時

ふと藤咲をみると何かを堪えるように肩が小刻みに揺れていた

「ど・・・どうしたの？ふ・・・藤咲・・・？」

シアンもアイナもしまった って顔をした。後悔しつつ藤咲の言葉を待った

「・・・・だ・・・だめ・・・おもしろ・・・すぎます」

といって笑い出した

「ですよ〜いいおもちゃです」

といってシアンも笑い出した

「ひどいなあ〜助けられてもいいのに〜」

なんだか俺もおかしくなつて笑っていた

冷たかった空気はどこかへ行つたかのように暖かくなつたきがした

そんな空気の中 アイラはボスの笑顔をみて驚いていた

彼女はボスとあまり話したことがない アイラはシアンと仲はいいものの

シアンとボスが話している時は常に黙つて口を挟まないようにしていた

アイラはただの一般兵、階級は無いに等しいものだつた

ボスの印象は冷静で無表情、事を淡々とこなす感情を顔にだすことは無いのだと思っていた

しばらく笑つた後、藤咲の命令で手錠を外して2人が退室していった  
再び沈黙になる と思つたので嫌な空気になるまえに話を切り出した  
「なあ藤崎 ここは・・・どこなんだ？」

彼女は俯き 小さく「やつぱり」とつぶやいた そして

「そう、やはり何も知らないってことはFatherに会つてないのね」

また英語！？とおもつたがさすがにそれくらいは知っていた

「えっと・・・ふあ・・・ファザーってお父さんって意味だよな？」  
ちよつと不安だつた

「そう。会っていないのならココのこと話すまえに聞きたいんだけど」



そのお父さんについて聞きたかったけど後で話してくれると思い  
質問を施した

「あ、えと・・・なに？」

「どうやってココに来たの？」

やはり だけど「あなたを見つけてストーカーしたらココにきちや  
った」なんていえる訳もなく、言い訳できるほどいい理由もなかった  
しばらく考え込んでいると

「話せないってこと？」

心配な表情で見つめてくる

「あ、いやそーじゃないんだけど・・・なんていうか」

汗が止まらない 脱水症状起きるんじゃないか？という雑念を追い  
出して恐る恐る話した

「その・・・やましい気持ちとかじゃないんだけど・・・たまたまっ  
ていうかね・・・今日の帰り道で藤咲を見かけて・・・そしたらなん  
か英語で何か言って消えていったから・・・その単語必死で思い出し  
て言ってみたら・・・穴がでてきて・・・気づいたらこの世界に・・・  
」

彼女は黙って聞いていた ただ手を強く握り締めて・・・

外が騒がしくなった

また訪れた沈黙をあざ笑うかの如く 窓からは笑い声や話し声がす  
る

「ほ・・・ほんとにストーカーとかじゃなくて・・・その・・・偶然とい

うか・・・」

焦りながら言い訳をしていた　実際藤咲について考えていたのだから後ろめたさもあつた

彼女は小さく深呼吸をして頭を下げた

「ごめんなさい」

わけがわからなかった

「え・・・？謝るのはこっちだよ」

それでも彼女は頭をあげない

「私のせいでココにきてしまった・・・私がもつと周りに注意していれば・・・」

「俺が悪いんだって・・・穴ができたとき入らなくてもいいのに入ってしまった俺が悪い」

頭を下げた　ただの好奇心　出来心だった

そんな俊介を地獄に突き落とすかのごとく彼女は言った

「あなたは・・・たぶん・・・この世界から2度と帰れない」

頭が真つ白になった　なんとか言葉を考え口にした

「え・・・帰れない？そ・・・それじゃ・・・ふ・・・藤咲も!？」

彼女も言葉を選んでいいのか少し考えこんだ

「その・・・私は・・・いつでもってわけじゃないけど戻ることができるの・・・あなたは呼ばれてここに来たわけじゃない・・・だから・・・戻れない可能性が・・・高い・・・」

彼女はすすり泣いた　何度もごめんなさいといいながら・・・

俺は初めてこのノリという遺伝、好奇心を恨んだ　でもなぜか落ち着けた

「そう・・・か、でも・・・藤咲は帰れるんだよね？」

彼女は小さくうなずいた

「ならいいか」

「・・・」

声が小さくてききとれない

「え？なに」

「なんで・・・」

できるだけ笑顔を作り出し 心配させないように言った

「だってこんな体験きつと誰もしたこと無いと思うよ？そりゃーさすがにシヨックうけたけどさ でも今更焦ってもしょうがないじゃん？受け入れて前に進むしか・・・ね？」

胸が救われた気がした

「ゆるして・・・くれるの？」

涙でくしゃくしゃの顔で

「許すもなにも 俺が勝手に来ちゃったし藤咲は関係ないよ」

そういつてハンカチを差し出した 持つててよかった

彼女はハンカチを受け取り 顔に当てた

涙まじりの声で「ありがとう」と小さくつぶやき 大声で泣き始めた

空も泣いていた 彼女の心を汲むように

しばらく雨はやまなかった

窓から入る雨の匂い 滴の落ちる音が音楽を奏でていた

コトッ

「コーヒー 飲める？」

藤咲は気が済むまで泣いた後　飲み物をとりに行っていた

「ああ、割と好きだよ」

正直飲めるものなら何でもよかった　お酒以外なら・・・

2・3口飲んで話を待った

彼女は深く深呼吸をしてこの世界について話しはじめた

この世界はおかしいと始めに言った。元々ここはインガクス王国、バズクール王国、ユースウェル王国の3つの大きな王国でできている世界らしい

インガクス王国とユースウェル王国は昔から仲が悪いらしくいがみ合っていた。バズクール王国は中立を宣言し、時には仲裁としても動いていたが基本何もしなかった　たとえ自国がしでかした揉め事でさえ「しらん！」と言い切って動かなかった

そんなバズクルの国王に両国は苛立ちを覚えていた  
70年前に事件が起きた。バズクルの国王が暗殺されたのだ。彼は身内からも嫌われていたらしく彼にとって敵が多すぎたことにより首謀者は一切あげられなかった

インガクスはユースウェルを　ユースウェルはインガクスを犯人だと決めつけ小規模であるが戦争が始まった。なぜ元々仲が悪いのは掲げる信念がまったく持って正反対だった。

インガクスは攻撃こそ最大の防御なり　と、力で成り立つ政治  
ユースウェルは守りこそ最大の力なり　と、知で成り立つ政治  
だった

それが故にお互いが意見をいってもお互いが折れることなく争いが起きていた

そんな時にバズクール国王の暗殺　しかし好機でもあった  
最初に動いたのはインガクスだった。国王のいなくなったバズクルに戦争を仕掛けたのだ

当然の如く国には兵士がおりそれを吸収しようと考えたのだ

さすがに今手を出すと暗殺を肯定してしまうのだが、遅れをとらないためにもユースウェルも手を打った。戦争ではなく亡命として国が受け入れる、と伝令を送った。

バズクールにとって国王暗殺でそれどころじゃないときに戦争をしかけたインガクスより力ではなく暖かく迎えてくれるユースウェルになびいた。だが、インガクスの方が早く動いた為なかなかうまくいかず結果4：6の割合でユースウェルの方が少し多かった。

しかしその6割中4割が商人や貴族、戦いを知らないもの達が我先にと来てしまったのだ

バズクールは戦争を仕掛けて出てきた兵士に投降させ十分に得るところができていた、が

銃器、弾薬などを大量に消費して兵士確保はできたが武器を作る職人、商人が0に等しかったのだ。結果兵士は多いが武器に余裕がないインガクス王国、武器は多いが兵士が少ないユースウェル王国となった。

バズクルの領地はインガクスが攻め入っていたので7割を獲得していたが10年で武器類の作成が追いつかなくなりその後20年でユースウェルが武力差で押し込みなんとか5：5まで縮めることができたのだ

そんな時にとある大きな音とともに地震が起きた

人々は戸惑い、神が怒ったのではないかと祈る者が多かった

その地震は先ほどのとは違って大きく、家屋がいくつも壊れた

地震が止まり大きな音がなくなった時、人々は驚愕した

目の前に壁ができていたのだ

「壁!？」

どんな物なのか想像がつかない

冷たくなったコーヒーを1口飲み 説明した

「そう。さっきの地震と音は壁がせりあがる時に起きる音と揺れ、

サイレンと地響きなの」

あれかな・・・ベルリンの壁だっけ？あんな感じなんだろうか・・・

「その壁ってのは・・・ベルリンの壁みたいなの・・・？」

合ってるのか不安で少しドキドキ

「そうね・・・似ているけど全く違うものね」

ある意味ほつとした

「どう違うの？」

彼女は窓から外を見た　遠くを見るように

「国を・・・分けているの。とても高く天辺が見えないくらいの大  
きな壁が・・・ね」

おどろき、窓から外を見た　すでに暗くなっており何も見えない  
雨も止んでいた

彼女のほうに向き直り

「国を分けてるって・・・ぜんぜん想像がつかないんだけど・・・」  
彼女は説明してくれた

どうやらその壁とやらはとてつもなく長く硬く高いものでインガク  
スとユースウエルの間ででき、真上にあったバズクールを真っ二つ  
にしてせりあがっているらしい

おかしいのはこの壁の存在だといった

なぜなら戦い、領土を奪う、もしくは奪われれば壁の位置が変わる  
ということ

つまり必ず時刻になるとサイレンと共に壁が交戦ポイントに出てく  
るらしい

日があけると同じくサイレンと共に壁が埋まっていくそうだと　その  
せいで地震が起こる

たしかにおかしい　いや、ありえないだろう

「信じられない？でもこれがこの世界の現実なの」

しばらく考えた　が、答えなど見つかるわけも無く

「そうか・・・まあ受け入れとくかな」

彼女が少し笑顔になった気がした

「それが大まかなこの国の歴史」

そういつて残りのコーヒーを飲み干した

俺も飲もうとカップに手を伸ばしたけど　もう空っぽだった

「えーっと・・・おかわり！」

彼女は笑顔でカップを持って出て行った

冷たい風が入ってくる

さっきまでの雨の影響か　どこか湿った空気だが心地よかった

「しかし・・・腹減ったなあ・・・」

考えても壁なんてよくわからない　それよりもお腹が空腹を訴えていた

コンコン　ガチャリ

「コウなんとかくメシもって来たよおー」

目の前に乱暴に置かれスープがこぼれた

「ちょ！こぼれたじゃん！！」

「気にするな　ちっさい男だなあ」

シアンは反対側にそーっともう一つ置いた　そして静かに椅子を引いた

「ボス　どおぞ」

藤咲は戸惑うことなく座った

「シアンさん　ありがとう」

「いえいえ、では失礼しまあす」

笑顔でシアンは出て行った

「なんだこの差は・・・」

ぶつぶつ文句いいつつフォークを手にとって肉らしきものにぶつさし口に放り込む

「どう？おいしい？」

「なかなか・・・もぐもぐ・・・んまい・・・もぐもぐ」

彼女はしばらく笑って食べ始めた

2人とも一言なく食べ　食べ終わった食器をまたシアンが取りに来て出て行った

「しっかし・・・シアンって人・・・あれ大丈夫なの？個人的に危険人物なんだけど・・・」

冗談で言っただつもりだった

彼女は少し悲しい顔をして言った

「シアンさんはね・・・両親、兄弟共に戦争でなくしているの・・・」

言葉を失った　皆どこか笑顔だったから戦争の酷さを考えてなかった

「もちろんここにいる全員がそう。家族や友だちを失っているのでもね、みんないつだって元気で、笑顔で、過ごしている　いつか戦争のない国にするために戦っているの」

しばらく目を伏せて　力強く言った

「私はそんな彼女らを助けたい！だからここにきたの」

彼女がとても眩しかった　俺はなんにも言えなかった　俺はなん



でここにいるのだろう

何も考えずノリで来てしまった世界 戻る事ができず軽く受け入れた世界

戦争のある世界 悲しい気持ちを押さえ込み笑顔で過ごし戦う世界

なにもできない自分 戦争の意味を知らない自分 力のない自分

知識のない自分 周りを見ようとしなかった自分

自分の事がとても嫌いになった

外は薄暗くまだ夜明けより少し前のようだ  
昨日の雨の名残が小さな池を作り出していた

水溜りをぴょんと飛び越えながらアイラは言った

「まだ少し冷えるね 寒くない？」

空を見上げながらぼーっとしていた まだ星が輝いていた

「聞いてる？」

「ああ、綺麗な空だなあ」

さっぱり聞いていなかった

「まあいいや、それよりもいこ？あの丘上ったら見えるよ」  
正面にある小高い丘を指差す

「そうか・・・」

そういいながら後をついていった

あそこから見えるのか 壁が  
そう思うとなぜか足取りが重くなった

砂利道に岩や瓦礫が散らばっている それをものともせず軽々と上  
つていくアイラを必死で追いかけてながら登っていく

「ちょ・・・はやいつて・・・どーのぼったのこれ」

今3分の2ほど上ったところだがとくに置いていかれていた

「遅いなあ」俊介君 その穴に足かけて一気にひょいっとな  
慣れない瓦礫や岩との格闘に苛立ちを覚えた

「むう・・・」

俺は登山の経験はあったが山岳はない。まあ普通に暮らして上  
る事はまずないだろう

「ほら、もーちよつと」

といいながら最後の瓦礫を飛び越え丘を登りきっていった

「よつこい・・・しょつと！」

なんとか上りきれた

目の前には岩に座っているアイラがいた 空を眺めていた

「あれが・・・見たいつて言っていた壁・・・だよ」

空が暗い理由がわかった気がした

目の前には いや、ずっと遠くにあるはずの壁が空を割っていた  
まるでそこで世界が終わっているかのごとく堂々とそしてすさまじ  
い威圧感を放っていた

「これが・・・壁・・・なのか・・・こんな物が・・・国を・・・割って

いるのか・・・」

アイラは小さくうなずき

「うん・・・突然現れた壁　世界を分断する壁」

40年前に現れた壁　ただ眺めることしかできなかった

「私たちはこう呼んでるの」

「Absolute wall - 絶対の壁 -」

### 第3話：絶対の壁（後書き）

ストックを出した訳ですが思ったより減りがはやい@@;  
量よりも内容の区切りで載せたんですが・  
執筆？スピードを軽く超越しているため、これからはゆっくり更新  
したいと思います・・・

#### 第4話：決意と親友

「報告いたします」

ビシッと背筋を伸ばし額あたりに手を置き、敬礼をする。  
見たところ服装から結構階級が高いように見えた。

「第2エリア管轄アリエル指揮官より、2・5エリアにて狙撃兵1名の殉職に伴い、革命軍の進行撤退を余儀なくされ応援によって全滅は免れた」と報告が入りました。」  
彼は緊張のためか額に汗をかいていた

「よって狙撃兵1名の補充を要請とのこと 以上であります」

「ふむ、座っていいぞ」

顔や腕にいくつも傷がある初老は難しい顔をしながら座ることを施した。

「今の訓練生の出兵可能な人数はどうなっている」

初老の右に座っている口髭を蓄えた老人に尋ねた

「あまりよろしくありませんなあ・・・第28エリアに大量に送り込んでいるが故に質が追いつかない現状 基準に満たす物は150名以下となっております」

「死霊の谷・・・か」

その呼び名に全員がしぶい顔をし 頭をかかえた

エリアの分け方は単純に上（元バズクール領土）から下まで1～30に分けられていた

その中でも過酷といわれるのが28エリアで「死霊の谷」と言われていた

左右に広がるいくつもの谷に囲まれていて道が複数その谷を裂くようにできていている。その道はどれも上ぼり坂になっていてその先には荒野が広がっている

荒野側（敵軍側）からしか谷に上れないことから、上からの攻撃に対処できず無残な死体を築く まさに「死霊の谷」だった

「やはりほっておくわけにはいかんのか」

初老は重い口を開いた

「できません。」

キツパリと言い切った彼は再び沈黙をみなに与えた

彼はこの国の軍師として存在しているまだ歳は若いが頭のキレは誰にも負けないと自負していた。が、そんな彼でも28エリア攻略には手立てが思いつかなかった。

「だが・・・このままでは兵士がいくらあっても足りないぞ」

「では放置をして敵軍に多大なる武器をお与えになるのですか」

鋭い視線を初老にむけた 初老は黙るしかできなかった

28エリアの後方には資源が多く武器の生産量が1番ともいってもいいほどの良地なのだ

このやりとりを数年もの間繰り返して尚、いい案が出ず後回しにされている

ほどなく沈黙が続き、やはり次回に回され会議を終わるように初老は言った

「この案は・・・次回に回すとして 他に報告は？」

みな話しが反れたことに安堵し にじみでた汗をぬぐう

「ほかに無いようでしたら終わらせていただく」と、その言葉で一斉に席を立とうとした

「あ、その・・・第2エリアの補充の件はいかがですか」  
おそるおそる流れた会話を引き戻す 彼の階級はここでは1番下だった

「いまも聞いたであろう。28エリアによって訓練生が不足している よって援軍は送れない。それに2エリアは優秀と聞いているでは失礼するよ」

そういつて退室していった。

「はあ・・・またも仕事できなかった・・・」  
誰もいなくなった部屋で1人つぶやいた

彼の仕事は上との交渉によつての人員の援助、戦果報告だった

「あ！」

部屋に響くほどの声を上げた

「捕虜の件・・・言い忘れてた・・・」

彼は黙っておくことにし部屋を後にした

左遷だけは嫌だった 「死霊の谷」だけは避けたかった

太陽が顔を出し始め ベースにいる全員が慌ただしく動き回る

「5番隊全員装備チェック完了」

「おい、キースがまだ寝てるぞぉー」

「俺の分のメシがねえ!!」

「早くしないとダリウス部隊長にぶつとばされっぞー!」

その慌ただしさで目を覚ました暇人がいた

「んん・・・うるさいなあ・・・」

ハッキリしない頭で行きかう人々をぼーっと眺めていた

「起きろぉーコウなんとか」

と後ろからけりをいれられた

「ぐはっ・・・コノヤローなにすんだボケー」

「寝てるからだよ ぶぁーか」

そこには水を片手に天敵がいた いや、ジャ アンのような・・・



「なに？文句でもあるのかな？無職君」

う・・痛いところを突かれた

「む・・無職じゃない！いまに見てるよ 絶対シアンの上にたつてやるかな」

「おうおう 是非なつてもらおうじゃないか。もしそうになったら僕でもなんでもなつてあげる」

そう言つて投げキッスをした

「今の言葉、忘れないからな！」  
と、いつものノリで言つてしまった

「ただーっし、なれなかった場合は私の専属奴隷ね」

「なっ・・・まあいいだろう・・」（期間の話は絶対させないようにしよ・・）

「あ、そうそう・・」

ドキッ

「シアン隊長 全員準備完了及び、現在集合号令が出ました。」

「わかった、すぐ行く」

助け舟に救われたようだ

「それじゃあ行ってくるから、くれぐれも倉庫だけは1人で行かな

いようにね？あと武器も勝手に触らないように」

「ああ、わかった　ちゃんと帰ってこいよ？待っててやるから」

笑顔で親指を立て、そのままベース中央に歩いていった

と思ったら走って戻ってきて

「言い忘れてた　ボスが呼んでたぞー　んじゃ」

といってほっぺたにキスをし、悪戯顔で走り去って行った

「・・・ハッ」

なにが起こったのか・・・あ、これが青春なのか！！

つい顔がほころび　スキップもしつつボス、藤咲の部屋を訪れた

「なに気持ち悪い顔をしているの？」

へこんだ

「で、なにしたらいいの？」

ボス、いや藤咲の部屋へ来ていた

無駄なものが一切なく、質素ではあるが綺麗に整理整頓されていて  
清潔感が漂っていた

「あなたには一時的にいろいろな雑務をしてもらいます」

どこか事務を思わせるような淡々とした対応だった

「雑務？」

いろいろ見て回ったが全く想像がつかない

「ええ、アイラさんから案内されたと思います。その中で全てやってもらい、合うのがあなたのココでの職となります。そうですね．．まず給仕長のエドさんを尋ねてみてください」

1番できなさーなことを最初に言われてしまったが、反論できるほど俺は得意分野がなかった 当たって砕けよう！

「りよ．．了解．．」

部屋を出ようとノブに手をかけたところで振り返った

「なあ、藤咲はいつもこんな感じ？こう淡々と仕事こなすキャリアウーマンのな．．」

顔を上げて少し考えるそぶりをしてキツパリ言った

「ええ、これがいつもの私よ この間は動揺していただけ」

「そうか．．んじゃまた」

「それとここではアリエル指揮官だからそう呼ぶように 皆ボスと呼んでいるけど」

ありえる．．．ちょっと衝撃だった．．．

「は．．はい．．」

なんでアリエルなのかは聞けなかった  
とりあえず言われた通りに給仕長を訪ねることにした

案内されたといってもそこまで広いわけではない  
食堂、倉庫、トレーニングルーム、射撃場、入浴場洗濯場や娯楽施設などだった

「こんにちわー 給仕長はいますかー？」

食堂のドアを勢いよく開け叫んだ

「いま手がはなせない こっちきてくれー」

と、奥から手だけが呼んでいた 急いで駆け寄ると大きなフライパンを片手に調理していた

「あなたが料理長のエドさんですか？」

「ああ、そーだよつと」

焼いている肉をひっくり返した こんなのできないな・・・と内心つぶやいた

「藤・・・アリエル・・・から言われて来たんですけど」

アリエル・・・慣れないなあ・・・

「ああ、聞いているよ　料理経験はあるかね」

「いえ全然！試食なら誰にも負けません！！」

まあこーなるとは思ってたけどね・・・さ・・・さあ　次いつてみよー

当然の如く追い出されました

とりあえずいろんな所を回ってみたが　さすがに親ゆずりのノリだけでは無理だった

アリエルに相談しに戻って見たが、忙しいらしく「考えておく」で追い出されてしまった

「俺がこうしてる間にもみんなは戦っているんだな・・・」

自分にできることがないのに腹が立つ　いや、なにもできない俺に腹が立つ

「ん？ここは・・・射撃場かな」

少し中を覗こうと扉を開けてみると　そこに1人の後姿があった

赤い髪の女の子だったので、まさか・・・シアン！？とつい体が引いてしまった

「ん？だれ？」

振り向いたのはシアンではなかった　髪型や色はシアンにそっくり

だがまだ幼さが残った顔立ちで 残念なのかうれしいのか体の起伏が著しい 子猫みたいな子だった

「あ、すいません ちょっと覗いただけなので・・・」  
急いで退室しようとしていたら

「あ！もしかしてコウなんとか君？」

少女は立ち上がって指をさした コウなんとかて・・・orz

「た・・・たぶんそーです・・・」

「あはは 大丈夫だよ姉さんから聞してるよ おもしろいオモチヤ見つけたってね」

「オモチヤて・・・ひどい いつかギャフンと言わせてやるう！」

必死で笑いを堪えて少女はこっちに歩いてきて手を差し出した

「はじめまして 3番隊SR兵ルナです」

「はじめまして TG（使えないゴミ）兵の俊介です」

「TG？」

「使えないゴミ兵です・・・」

「ああ、なるほど！ってごめん・・・えと・・・よろしく俊介君 ところでここに何しにきたの？」

「いいさいいさ・・・アリエルに言われて仕事探しにでただけど、

どこもいらないうて・・・それでなんとなくここに来たらルナちゃん  
がいた分けさ」

少女は怒ったのかそっぽ向いてしまった

「あれ？怒ってる？ルナちゃん・・・？？」

「・・・」

「おい・・・」

「むう・・・まだ小さく見える顔に腹が立っただけです」

そうつって腰のポーチから手鏡を取り出し顔を見る

「あ・・・ごめんね　なんか妹っぽく見えてつい「ちゃん」つけちゃ  
った」

「いいんです　いつものことですから」

と言って手鏡をしまうとさっきいた場所に帰って愛銃を手取る

「えーつと・・・んじゃ失礼するよ　邪魔してごめんねルナさん」

さん　に気をよくしたのか笑顔になって

「俊介君はすることないんでしょう？見学していいよ」

「え？いいの？」

「うん そのベンチ使いなよ」

俺は言われた通りベンチに座ってルナを見ていた

少女に銃て・・・結構イケルな！！なんてコトを考えていた ヘンタ  
イジャナイヨ

ルナはSRを構え 的（人の形をした紙の様な物）に向かってひた  
すら撃ち込む

時には空き缶を置いて狙い打つ そんな少女を眺める変・・・俊介が  
いた

2・30分くらいたつたころ

「ねえ俊介君 暇でしょ？ちょっと手伝って欲しいんだけど」

ふいに話を振られ、ついビクツつとなった

「あはは、なにびつくりしてんの」

なさけないな・・・俺

「いや・・・銃なんて今まで身近になかったからちよつとね・・・でも  
音には慣れたぞい！」

「そかそか、慣れたならちよつと手伝ってもらえる？」



「なにしたらいいの？」

「そこにある缶投げて欲しいんだ　その缶を撃ち落とす練習したいの」

「投げる？どこに？」

「あのあたりにポイっとね」

結構・・・かなり遠く感じた

「あ・・・もしかして投げれないのお？肩弱いんだあ？」

小悪魔光臨　さすが悪魔の妹

「な・・・投げれるわ！そのくらい朝飯前じゃい！！」  
缶を手に取り思いっきり投げる

「あ・・・」

「え！？」

缶は勢いよく一番奥の壁に当たりどこかへ飛んでいった

「・・・」

「・・・」

「おれ・・・肩強つつつ！！！！」

「うん．．かなり．．ね」

いままで気づかなかった いや、そんなに力はなかったはずだ

「ま．．まあ投げれるみたいだし 合図したら投げてくれる？」

「イエッサー」

いまは深く考えるのやめよう りっぱな仕事ができただし

「ぽい」

「え？」

「ぽいぽい」

「え？え？」

「ぽいぽいぽい」

「え？え？え？」

少女はすくつと立ち上がり

「投げろや」

まさかの「ぽいぽい」合図だった

「じ．．じめ ん！」といって投げた

「い．．今か い！！」と全力で突っ込みをしたルナだった

射撃場は防音を施してある 兵士が寝るのは深夜となっているがその時間体も練習に使う人がいるため防音となっている

10人が同時に練習できるよう衝立がしてあるが 射撃台のところのみで奥には衝立はななく的が10コ置いてあるだけだった

後ろの方にはベンチ、灰皿、などと小倉庫があり、練習用としてさまざまな銃が置いてある

そんな場所で「カラン」と「ダーン」と「奇声」がしていた

「ぽい」

「どっせーい」

「ぽい」

「そいやああ」

「ぽい」

「ばっちこーい」

「ぽい」

「あいきやんふらーい」

「・・・飛びなよ 撃つから」

「・・・ごめんなさい」

お互い顔を見合わせ笑った

「さて、休憩しよっか」

「あいさー」

ルナは銃を持ったまま2人ならんでベンチに座った

「はあ・・・30個中10個くらいしか当てられなかったなあ・・・」

落ち込むルナに追い討ちをかける

「8個ダヨ」

「細かいことはいいの！しかし・・・姉さんには程遠いなあ・・・」

さらに落ち込んだルナに 聞きづらいけど尋ねてみた

「姉さんってシアンの事だよね？・・・本当の？」

ふと顔を上げて俊介の顔を見る

「あ、いやその・・・シアンの事はアリエルから聞いたから・・・その・・・」

「ううん、気にしないで シアン姉は本当の姉さんじゃないよ。シアン姉も私も同じ境遇でねシアン姉は妹を、私は姉を亡くしているの でね、私はシアン姉を本当の姉さんだと思って慕っているの」

「そっか だから髪の色や髪型も？」

「うん このストリーナーだって姉さんがくれた物なの」といって愛銃を抱き寄せる

「だから早く上達して姉さんに追いつきたいんだあ」

こんなに体も小さい子がこんなにがんばってる

俺もなにか、もつとなにかがんばらないといけないな

「ねね、俺に教えてくれないか？その銃の撃ち方」

軽い気持ちではない 俺はこの世界で生きることを決意した

ブルルルル

ブルルルル

「もしもし、斉藤ですが」

「あ、斉藤君？相沢俊介の母です そちらに俊介おじやましてない？」

焦っているような 心配そうな声だった

「いえ・・・今日は来てないですよ 別々に帰ったから・・・まだ帰ってきてないんですか？」

「そうですか・・・まだ帰ってこないの もし連絡あったら教えてね」  
そういつて電話がきれた

「どしたんだ？俊介のやつは・・・」

携帯を取り出して電話をかける

（お掛けになった電話は、電波の届かない所にあるか電源が・・・）

「こんなこと初めてだな・・・なにかあったんかな・・・」

その日何度も掛けたが繋がらなかった　気になってなかなか寝付けなかった

キーン　コーン　カーン　コーン

あの電話の後　俊介の母から電話はなく、見つかったのかと期待していた

「おーっす」

と元気よく教室のドアをあけた

「おう、浩介　昨日俊介のお母さんから電話あったか？」

「ああ・・・お前のところにも？」

「あつた、俊介まだ来てない」

窓側の1番後ろの席が空いていた

「どこいったんだよ・・・俊介・・・」

ガラッ

「おはよー みんな席につけー 委員長号令」  
(起立 礼 着席)

「えー、相沢は来てないか だれか相沢みてないかー？」

どうやら学校にも電話していたようだ

「朝学校に連絡があつて昨日から相沢は家に帰ってないそうだ。だれか知らないか？」

教室がざわつく

「斉藤、知らないか？」

名指しされてみんなが俺をみる

「いえ、昨日は別々に帰ったので・・・どこか行くとも言ってなかったのでつきり真直ぐ家に帰ったと思ってました」

「そうか 今日警察に行くそうだ。なにか思い出したらすぐ先生に知らせるように」

そついい残して教室を出て行った

なぜかもう1つの空席が気になった

「藤咲もきてないのか・・・」

いったいなにがあつたんだ・・・？俊介

胸のざわつきが消えたのは昼だった

夏特有の暑さと風が教室をかき回す

4時間目 俊介の事が気になり授業も頭にはいらず校庭を眺めていた

校門から誰か登校してきた 残念ながら女子だった

「あ・・・なんだ・・・女子か・・・」

近づくにつれ顔がわかってきた

「藤咲・・・」

なにか電気が走ったように立ち上がった

「どうした斉藤！授業中だぞ？」

「あ・・・その・・・トイレ！！」

言い訳をして教室を飛び出した なぜか分からないけど藤咲が知っている気がした

急いで行った為 校舎入り口で見つけることができた



「藤咲!!」

足を止めて浩介の方をみる

「はぁ・・・はぁ・・・ちよつと・・・聞きたいことが・・・」

藤咲は少し体が強張った

「なに？」

「俊介を知らないか？」

目を一瞬見開く その一瞬を見逃さなかった

「知っているんだろ!?!どこいったんだ!」

「知らない・・・」

そういつて逃げるように立ち去ろうとした

「待てよ!」

肩を掴んで引き寄せた

「あいつが俺に内緒でどこかへ行くはずがないんだ!知っていること話してくれ!」

視界がぼやけていた

彼女は「わかった ついてきて」と言っ歩き始めた

見つかったわけでもないが、少し安心した

## 科学実験室

不気味に飾られたホルマリン漬けが独特の不陰気を出していた

「俊介は・・・どこにいったんだ・・・」

彼女は目を瞑って 言葉を搜した そして言った

「俊介君は・・・ここにはいない」

「だから聞いてるんじゃないか！」

「ちがう この世界にはいないって・・・こと」

意味がわからない

「し・・・んだのか・・・」

「生きている・・・けど 異世界に・・・いるの」

## 第5話：破壊とゲート

その日は何もかも上の空だった

次の日の朝、親に無理やりという形で学校に送られ 教室で校庭を眺めていた

「おはよー!!」

教室の扉が開かれる 浩介は来た人を見てため息をだす

「だよな・・・」

自分のため息で息が詰まりそうだった

「浩介・・・大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ・・・」

友達に心配されているのは分かっていた けどなにかする気も起らない

「起立！礼！着席！」

号令もせず机に伏せていると先生が隣に来た

「お前までそんな暗くなるな。きっと帰ってくるさ」

言いたかった もう帰ってくることはない 限りなく0に近い事をそのまま4時間目を終わり昼休みになった

いつもなら教室で俊介とあほみたいな会話をしている　しかし相棒はいない

「初めてだな・・・こんなにつまなく感じるのは・・・」  
小さく呟いた

赤ちゃんの頃から今まで兄弟のように、双子のように、育てられてきた　いつも隣には俊介がいた　どんなことでも付き合っあほな事をしてきた　けど今はいない　これから・・・

「いやだ!!」

怒声と共に机を叩きつけた

みんなの視線が浩介に向いた　が、そんな事はどうでもいい

視界の端に藤咲を見つけた

「藤咲、ちよつと話がある」

5時間目のチャイムが聞こえる

「本当の事なんだな？全部」

彼女はうなずいた　手は硬く握られていた

「そうか・・・」

いきなり自分の顔を両手でひっぱたく

「よし！藤咲、俺も連れて行け その異世界とやらに！」

声でもないほど驚いた

「なに持って行ったらいいかなあゝお菓子とゝ弁当とゝトランプとゝって遠足かいっ」

「ま・・・待って！なんで！？今言っただでしょ どんなに危険なところか、帰って来られない可能性が高いことも！それなのになんて！？」

やれやれっと手を広げてため息をついた

「俊介がいなきゃつまらないんだよ 俊介がいたら俺はどこだって楽しくなれる いなかったら逆につまらないんだ。そんな世界に未練はない！！」

「残された家族はどうするの！？学校のみんなは！？」

「大丈夫だ。俺から俊介の家族にも伝える 言えばわかってくれる」

言葉を失った 異世界なんて信じるわけが無い

「で、俊介はどうやって藤咲についていったんだ？」

「・・・」

「なあ、藤咲？」

おかしくなった

「なんで・・・なんで君達はそんなに受け入れるのが早いの？」

ニヤリ と笑い言い切った

「俺達はな、それだけが取柄なのです！」

「ったく・・・」

呆れたようにため息を出し、両親に話すべき事を助言してくれた。  
そして「今日の午後9時に学校の校門まできて」といって彼女は実験室をでていった

俺はそのまま教室に戻り鞆を掴んで「早退する！」といって帰った

ピンポーン

勢いよくドアが開かれた

「俊介！？」

俊介の両親があわてて出てきた

「こんばんは 浩介です」

浩介は両親と共に俊介の家に来ていた

「亮、香苗さん大事な話があります」

浩介の父はそういった

「俊介君の行方 わかったんです」

2人は驚いた顔をして浩介の顔を見た 浩介は力強くうなずき聞いた全てを話した

「そ・・そんなの信じられるわけがないじゃない!!」

沈黙を破るように香苗は机を力いっぱい叩いた 灰皿にたまった吸殻が転がり落ちた

「哲、それは本当・・なんだな？」

「ああ、俺は浩介を信じている」

「私も浩介が嘘をいつているとは思えないんです」

再び沈黙が流れ 俊介の両親も「信じる」とちいさくつぶやいた

「で、浩介君がその異世界に行くことは許せるのか・・？」

「父としてなら断固反対だ！ だがな、俺が浩介の立場なら反対されても亮を探しにいくだろう と思ってな」

どこか誇らしげな顔をしていた

「ああ、逆なら俺もお前を助けに行くだろう・・・でも行くなら親の俺達が行く」

「そうよ！行くなら私達が」

2人が立ち上がった

「俊介のお父さんお母さん、残念ですけどそれは無理なんです」

浩介に視線が集まった

「藤咲がいうには未成年じゃないと世界の狭間とかから出れなくなるとか」

「なあ亮 自分の息子を信じてみないか？」

「そうだな・・・あいつ、やるときはやるタイプだしな・・・」

「そうね・・・浩介君、俊介を・・・頼みます・・・」

「もちろんです！かならず見つけ出してつれて帰ってみせます！！」

父、亮は浩介の肩に手を置いた

「行ってきなさい浩介 可能性が0ではない ならば縋り付いてでも生きて帰って来い！」

「私たちはここで、この世界でいつまでも待っているから・・・」

こみ上げる感情を押さえ込み 力強く



「行ってきます！」

そついつて相沢家を飛び出した　振り返らず真直ぐ学校に向かった  
浩介が走った道には小さな水滴がキラキラ光り　地面に落ちる前に  
消えてしまった

相沢家でも泣き声が響いていた

彼女は腕にはめた時計をみる　9時を少しまわっていた  
ため息をついて彼が来るのをあきらめようと手を前に差し出した

「The・・・」

「おい！！」

彼女が振り返ると

「待ってくれー！」

彼が走ってきた　目の周りが赤くなっていた

「遅くなつてごめん！」

できる限りの笑顔を見せた

「そうそう、反動があるからしっかり肩に固定してね」

ルナにいわれるままにストーナーというスナイパーライフルを担いでいる

「トリガーにはまだ指かけちゃダメだよ スコープちゃんと見えてる？」

「うん 缶の文字が読めるくらいね + になってる中心を缶の真ん中でいいんだよね？」

「そう ゆっくり息を吸って止めて撃つ 自分のタイミングでいいからね？」

いわれた通りゆっくり息を吸う ぐっと息を止めて指を引いた

ダーン

カランカラン

「お、当たった！って当然だよなあ・・・真直ぐ飛ぶようになってるんだしな・・・」

と、ストーナーを台に置いた

「そんなことないよっ！！すごいよ！！普通は反動で反れるはずなんだよ？」

「え？そうなの？？むしろ反動が小さすぎというか・・・やり方間違ってた??？」

強がりでもなく本当にそう思った ルナを見ていた事でかなりの反動を期待していた

「間違ってたよ だけど反動が小さい・・・？ 十分大きいはずなんだけど・・・」

ストーナーを手に取り 変わったところがないかを一通り調べて「もう1回」といった  
5回ほど撃ち 同じ結果に俺は満足 ルナは腑に落ちない顔をしていた

「むう・・・反動が小さいか・・・あ、アレ使ってみる？」  
と言って小倉庫に入っていた

「アレってなんだろう・・・」

ルナは埃まみれの細長いアタッシュケースのようなものを必死に抱えて戻ってきた

「ふう・・・これはね バレットM82といって破壊を求めた対物ライフルなの」

埃を払いのけケースを開く

「なんか・・・重そうだね・・・」

「なんと13キロあるよー でもね、これすごく長距離用でね2キロ先も撃てるんだよー でも、ここでは練習できなかったり・・・でも威力と反動は保障します！」

笑顔でさりげなく酷いこといった あらやだ奥さん13キロですって！

「そ・・そう・・13キロ・・あ、重さはいいとして2キロ先も撃てるってことは素人の考えなんだけどスコープのせい？さっきのスコープ使えば近くもイケル！なんてことは？」

うーん・・と唸りながら考えて 愛銃が使っていた同じ型のスコープを倉庫から出した

「できなくは無いと思うけど・・私じゃ無理かな？そうだ、カミールさん呼んで来て」

「わかった、いつてくる！あの人が武器に詳しいんだ？」

「うんーマニアの域だよ 必要そうなものは用意しとくー」とクスリと笑い再び倉庫に入っていた

「えーっと、たしか第1開発室にいたはず・・」

「呼んだかね？」

「うわっ！」

背後からのっそりでてきた男、身長2mくらいあり体もマッチョで熊にも素手で勝てるんじゃないかと言う噂（俺だけが思ってる）この大男がカミールだ。

「ええ、ちょうど探して・・ってなんで探していたのわかったんですか？」

「なあに、射撃上は私の管理下だからね　盗聴器の1こや2こは朝飯前さ」

なんだか射撃場だけじゃない気がして　背筋に悪寒が走った

「やぁルナちゃん　あれからストーナーの調子は？」

ドアをノックして入って行ったカミールはルナを「ちゃん」付けで呼んだ

さすがのルナも彼だけには訂正できないようだ

「ええ、いい調子です　けど腕のほうを追いつかない・・・デス」と、いじけてしまった

ガハハハ　と豪快に笑い何かをポケットから取り出した

「これは昔俺が作ったバレットM82用のスコープだな　この部分を回すことで距離調節ができるという優れ物なのだ　折角これが完成したと思ったら使う者がいなくてな」

と、肩を落とした

「でも、これが役立つ時がきておじさんはうれしいよ」

ガハハハ　とまたしても笑い俊介の背中をたたく

「痛いっすよ・・・で、どうやって扱えばいいんですか？」

さっきのストーナーとは形も全然違っていて2脚もついている

「しらん!!」

言い切ったぜこのおっさん

「このバレットはな　今は誰も使わないから扱い方を知っている人はいないのだ」

なんでスコープを作ったのか聞こうとしたが気づいた。「今は」に。つまり・・・

「まあメンテは俺がしているから問題はない。それに同じSRだ。基本は同じだからいろいろやってみればいいだろう　がんばれ若者よ」

といって出て行った

「んじゃ俊介君　スコープはとりあえず着けたから・・・」

「ん？」

「GO!」

「撃てるか　　!!」

といいつつも、とりあえずさっきの用に担いでみた

「ふむ、思ったよりは重くないな　重いけど」

「セミオートみたいだから連射も一応可能みたいだね」

「あ、そうなんだ さっきのと同じ感じでいいのかな？」

先ほどから射撃していた台まで歩き スコープを覗く

「あ、めっちゃばやけてる・・・」

「自分で調節できる？やろうか？」

心配そうに見つめてくる

「ん、できると思う・・・あ、できたできた」

意外と距離調節はダイヤルを回すだけという簡単なものだった

「ただ着けたただけだから真直ぐじゃないから自分で調整しなきゃダメだよ？」

「ん、とりあえず撃つてみたいから下がってて」

「あせらず慎重にね」

ルナは2mほど下がって「OK」と合図をくれたのでゆっくり息を吸い、止めて指を引いた

ズドン

目の前では発砲煙が 奥ではブロックが碎け散って砂埃を上げていた

なんだかんでもない物を出してしまったと2人は後悔した

この化け物の調節を終えた頃 射撃場は一部壊滅となっていた

「・・・」

「・・・」

とりあえず眺めた この光景を しっかりと心に馴染むまで

「トリアエズ ダレニ アヤマツタラ イイト・・・オモイマスカルナサン」

「ソウデスネ ボス カミールサンデスカネ」

2人は揃ってため息を盛大に吐いた

「それじゃあ・・・どっち行きたい・・・？」

「あ、でも私の銃じゃないし撃つたのは俊介君だし・・・ごめんね」

猛ダッシュで走り去っていったルナを後ろから狙撃したかった

「むう・・・メンテとかわからんし カミールさん!!どうせ聞いているんでしょ？」

ひょこつと・・・いや、ぬうつとドアから出てきたのはゴリ・・・カミ



ールだった

「ガハハ さすがに分かるか しかし、派手にやったなあ」

外が見えるほど開いてしまった穴を眺め 俊介の方を見た

「ふむ、38発ってところか」

「え、見ただけでわかるんですか!？」

「何年銃を弄ってきたと思ってる。穴の件はボスに報告だな メンテに関しては教えよう」

そついうとなにやら紙を差し出した

「この順番にやるといい、必要だろうと思って書いておいた」

「ありがとうございます あ、スコープは外れたり動いたりしないように固定ってできませんか？」

「そうだな、それはやっというてやろう。その間に怒られてこいや」

憂鬱な気分で射撃場を後にする。ドアを閉めるまでガハハと響いていた。

コンコン

中から「どつぞ」の声にゆっくりドアを開けた

「えーっと ちょっと困ったことと言っか・・謝りたいことと言っか・・その・・」

「その前にこちらの話を聞いてください 丁度呼ばうと思っていたところでした」

なんだろ・・？あ、仕事の件かな

「仕事の件ですか？」

「いいえ、あなたの事です」

「え？俺のことって・・？」

「もうすぐ元の世界はお昼休みに入ってしまうわ 私は戻ります。」

「あー・・そうだったな 両立してるもんなアリエルは」

少し両親の事、友達の事、学校の事を思い出した

「ああ、俺の事は気にしないで いつもどおり戻ればいいさ」

「いえ、そうゆうことではなくて・・・俊介君からの伝言を預かるうと思って・・」

伝言・・か・・いや、しないほうがいいな。戻れないのに変に期待させる方が良くない

「伝言はしなくていいよ あ、浩介からなんか言われると思うけ

ど無視してやって」

「本当にいいの？それに斉藤君はいつも一緒にいた仲でしょ？覗きの時だって・・・」

やべえ！！ここでそのこと言われるのか！！

「覗きはホラ・・・アレだよ・・・うん！とにかくアレだ！」

呆れた風に手を広げた

「そのことはいいけど・・・本当にいいの？」

いいのか！！ならもつと見ておけば・・・いやいや、

「あいつに話すと絶対に来るって言うだろうからな　こんな事は俺だけで十分さ」

しばらく考え込んで

「わかった　で、何かしたの？」

「ああ、そうだそうだ　よいしょつと・・・」

とりあえずひざを突いた

「え・・・なに！？」

「ごめんなさい！！射撃場のコース1つ壊しました！！許してください！！！」

地面に頭をつけた

「ええ！？壊したって・・・いったい何したの！？」

「その・・・仕事見つからなくてアリエルのところに行った後なんとなく射撃場にいったんです。

そしたら色々あって壊しました！すいません！！許してください！！」

「その色々を話さない！」

ちっ　押し切れないか・・・

「ルナさんが練習をしまして・・・暇だろうと手伝いをしまして・・・なんなら撃ってみまして・・・んでもって対物ライフルが出てきまして・・・ごっついおっさんがアイテムくれまして・・・撃ちまして・・・全壊ってくらい壊れましたとさ　めでたしめでたし。」

「・・・」

アリエルの手がプルプルと震えていた

「・・・なさい」

「え？」

「さっさと直してきなさい！！」

「ぎょ・・・御意！！」

それはそれはとても恐ろしかったですよ ええ、車にも勝てそうな勢いで逃げましたよ

とにかくセメントなど直すのに必要な物を探し射撃場についたのは1時間も経っていた

「ぜー・・ぜー・・おそくなりまし・・た・・」

盛大に倒れこんだ

「おう 遅かったなあ しっかり直すようにいわれたみたいだな  
ガハハハ」

このおっさんめ・・

「メンテ・・お願いします・・」

体を引きずる用におっさんの所まで這って行った

「おっし、やるか！ああ、固定しといたからずれることはないだろう」

意外とスパルタだったらしく できる頃には身も心もボロボロになっていた

「なんとかできるようになったな ああ、この後修復があったな。がんばれ」

といって笑い去っていった。

「ああ・・・むしろそっちが大事だった・・・そういえば昼メシ食ってなかったなあ・・・」

ハッ 働かざるもの食うべからず どっちにしても食わせて貰えな  
いかもな・・・

「どう？進んでる俊介君？」

敵が自ら現れたようだ

「この・・・」

「ご飯持ってきたよ・・・ん？どしたの？」

握り締めた拳を後ろに隠し、ひざまずく

「いえいえ、ありがとうございます女神様」

貪る様に一気に平らげた

「あー生き返ったあゝ」

「あはは よかったよかった」

ちらつと修理材料を見て

「しょうがない！手伝ってあげるからさっさと直しちゃおう？」

下手に刺激してやらないって言われるとアレなので抑えた

「だな・・・」

サイレンの音と共に地面が揺れる

「あ、もうこんな時間だね」

まだ3分の2ほどしか穴が埋まっていなかった

「ほんとだ ルナはもういいぞ みんな帰ってくるだろうし」

気が緩んだのか呼び捨てになってしまった

「ごめ、つい呼び捨てしちゃった」

「ん？いいよおー「ちゃん」以外ならね」

よほどいやなんだろうな・・・

「そうだね、姉さんも帰ってくるし ちょっと行ってくるね」

「うん、サンキュウな手伝ってくれて」

「ううん、すぐ戻るから無理しない程度にがんばってて  
といって走っていった

「さあーと、もうひと踏ん張りしますか」

しばらく1人修理していると

ドアが勢いよく開かれた

「お、やってるやってる！また派手にぶっ壊したなあ」

振り返るとそこにはシアンがいた ルナがつれてきたようだ

「ちょ・・・シアンはくるな！絶対壊す気だ！！」

「む！失敬な！！まかせろ えいやー！！」

後10分で終わるはずの作業が1時間になったのは言うまでも無い

「はあ・・・酷い目にあつた・・・」

「くよくよすんなって！いいことあるって」

そういつて親指を立ててウインクをした

「ったく・・・誰のせいでこうなつたと・・・」

「で、いったい何したんだ？手榴弾でも投げたか？」

「ある意味近いものがあつたよ姉さん」



冗談のつもりだったらしく

「あらま、おとなしい子だったけどいつか何かする子だと思っていたんです・・・」

「おいおい・・・少年犯罪に対する近所のおばちゃんかつ!!」

2人そろって俺を笑いものにする　一通り笑ったあと

「姉さん、俊介君はバレットM82をぶっ放したの」

「ほええゝそれはびっくりした!そんなの使うならMSGやPSGがあつたのに」

「ストーナーを最初に撃たせてあげたら反動が弱いとか言うからつい持ってきたら・・・」

「ええ、ご覧の通り　壁修復になつたんだぜ」

誇らしげに言った

「そっかーまあ対物ライフル使う人いないし物にできたら十分な職となるね」

うんうん　と、うなづく

「あ・・・なんだかんだで職・・・見つからなかったんだ・・・」

再び落ち込む

「まあなんだ、私もルナも同じSRだし 基礎くらいは教えてやるからがんばれって」

背中をまたもやひっぱたかれて 今日何度目かの悲鳴を上げた

汗や泥でまみれた体を流すために風呂に入つた

といってもシャワーだが

1つ1つ個室になって並んでいて、服もその中で着替えるのだと教わっていた

「はあ・・・職が狙撃です！なんて元の世界で言ったら精神病棟か警察行きだろうなあ・・・」

今日の濃い1日を思い出していた

キイー・・・パタン

隣に誰が入ってきたようだ

「おつかれさま」

と何気なく言ってみた

「あ、おつかれさまあゝ って俊介君？」

「ほえ？・・・アイラさん!？」

ええ！？ここ女湯！？いやいや、風呂はここだけだったし・・・時間帯か！？

「シアンから聞いたよぉー破壊王俊介の誕生だったね」

クスクスを笑い声をする

「破壊王で・・・好きで壊したんじゃないけどね・・・ってココは女湯だったりするの・・・？」

「うっん、男女兼用だよぉー個室だし皆気にしたことないけどね  
気になる？」

気にしますとも！なんてったって高校生ですからっ！！

しかも隣の壁は高さ2mくらい 下は膝あたりから向こうが見える  
ような構造

175cmの俺は十分と言っていいほど覗く事が可能で、天使と悪魔が頭の中で喧嘩を始めた

当然の如く悪魔が勝った しかもバレットを使い天使を粉碎玉砕大喝s(ry

「俺も気にしないよー」

と言ってとりあえず上から攻めることにした

今までにない全神経を使い音も押し殺し、気配すら絶つ

壁の上部にゆっくり手を掛け、力を徐々に込め始める

足が踵から浮き始め 視界はまさに秘境目前 グランドキャニオン  
まであと少し！！

すっ と視界に手が入り込んだ 手の形は銃だった

「バーン！」

「うおっ」

びっくりして手を離してしまい ケツから落ちた

「いつてー」

「あはは 自業自得」

ミッション失敗です大佐あああああ 敵はあまりにも強すぎま  
す！！！！

「急に気配が消えたんだもん 絶対なにかしてくるってすぐにわか  
ったよ」

「チクショーーーー！！じゃなくてすいませんでしたあ！！！！」

「あはは けどそんなに見たいものかなあ？」  
と、自分の体を見る

「漢たるもの、女体を目前にして、覗かない者は極刑に値する！！」

「そ・・・そんなに熱いのね・・・」

「うむ、だから言おう！正直に！！覗かせてください！！！！」

「んゝそうだなあ バレットで私達を守ってくれたら・・・かな？」

職が完全に決まったことを ここに表明する

シャワー後、射撃場からバレットを持ち出して外に出て行ったのは  
言うまでもなかった

「アイラゝコウなんとかどこいったー？」

シアンがお酒両手に声をかけた

「なんかやる気でしたのか知らないけど、バレットもって外いったよ  
おー？」

「ちえー折角むりやりお酒飲ませようと思ったのになあ」

「それで2個もっているのね」

「まあね まあやる気になったのは良い事だ 関心関心」

「んじゃ それ貰うね」

と、2人は皆が飲み所として使っている外の広場に向かった

夜しか練習できないため、明け方まで練習をしてベースに戻った

「みんな寝てるな・・・静かでいいことだ」

自室に向かう前に射撃場を訪れてバレットのメンテをした

「ふう・・・今日は疲れたなあ」

俊介はメンテを終わらせた後、その場で寝転んでいたらいつのまにか眠ってしまった

昼過ぎに目を覚ましたときには毛布が掛けられていた

「誰だろ・・・まあいいや、メシメシっと」

食堂でご飯を食べた後、練習もできない為、行きかう人にちょっとした手伝いを申し出て暇をつぶした

サイレンと地震が鳴り終わると、バレットのケースを持ってきて皆が帰ってくるのを待った

シアンやアイラ達との会話をそこそこに夜の練習へと繰り出していた

ズドーン、ズドーン、ズドーン、と誰もいない場所で音だけが木霊していた

「やっぱり距離調節がネックだなあ・・・素早くできたら少しは楽園に近づけるのに・・・」

と、スコープに何か映った。いや、誰かが額を押さえて瓦礫から辺

りを見回していた

「敵か！？いや・・・まさか・・・浩介！？」

藤咲は案内をした 俊介消えた 後を追ってきた ゲートを開いた  
場所

「ここよ」

なんの変哲も無い普通の道路の一箇所を指差す

「そうか、ここから俊介は・・・で、どうしたらいいんだ？」

藤咲は手を前に持って行き

「The different worldとopenを繋げて言  
うとゲートが開くわ」

「そうか・・・あの電話で俊介は・・・やっぱり俺のせいもあったんだ  
な」

「どうゆつこと？」

「昨日電話があったんだ differentってどう読む？って  
な」

「そう・・・」

「だから俺にも責任はある！全部が藤咲のせいじゃないから・・・まあその気にするなっ事」  
少し照れたように頭を掻く

「ありがとう・・・」

少し湿った声だった

「さ・・・さあ行こうか 俊介をぶん殴りにな」

「ん・・・一応先に行くから見ててね あ、向こうに着いたらなるべく人目につく所にいてね」

「戦争なんだろ・・・？大丈夫なのか？」

撃たれたらたまらん！

「今は壁があるから少なくとも敵はいない それにいきなり撃たれるって事はない・・・はず」

その間「・・・」がなんか怖いな

「壁？ま・・・まあいいや よし、行ってくれ」

うなずいて手を差し出し

「The different world open」



空気が 風が 町が 張り詰めたような気がした

「あ・・・光があつまっていく」

「これがゲート」

藤咲の目の前には2mほどの穴が開いている

「それじゃまた後で」

そういつて藤咲が入るとゲートは消えてしまった

「んじゃ行くか・・・」

深呼吸と咳払いをして

「The different world open」

先ほど見たよりは頼りなげな光が集まり穴を、ゲートを開いた

「なんか・・・ちっさ!!!!」

どうやら発音の違いではなかった

やはり50cmくらいの穴が頼りなげに浮いている

「うつし! I'll be back!!!!」

頭からダイブをした そう彼も知らなかったのだ

出ていきなり額に痛みを受ける事を

## 第6話：友情

ドサッ

「うぶっ！いつて　　！！！」

叫びながらその場でのた打ち回る

「ハッ！ここが異世界・・・か」

ズドーン

「ひい！！！」

彼も俊介顔負けのスライディングを見せた

「な・・・うそつきー！！めっちゃ撃ってるじゃん！！！」

恐る恐る周りを見渡すが誰もいない

「こ・・・こんな中を人目につく所に行けと？ないない、あり得ない！！！」

ズドーン

「うおっ！！！」

10mほど向こうで砂埃を巻き上げていた

「ち・・近っ！！狙われてるのか！？俺はここで終わるのか！？」

なるべく見えないように奥に潜り込む

発砲音がなくなつて5分くらいしただろうか

「終わった・・？いやいや・・今出て行ったら待つてましたと撃たれるに違いん・・」

小言を言い終わる前に

「そこに隠れている奴でてこい！でなければ手榴弾を投げ込むぞ！」

「！！！！」

やばい！！これマジやべえ！！！！せつかく来たのに7分でおしまい！？

「ま・・」

コンコロコンと音を立てて何かを投げ込まれた

「ぎゃあーーーー！！」

絶叫しながら飛び出した　慌てていた為に体のいたるところをぶつけた　死ぬよりはマシ。

「こ・・殺さないでください・・・許してください・・・ただの高校生です・・」

出てきてすぐ土下座をして 半泣きで懇願した

「……………ダメだ……」

「そ……そこをなんとか……お願いします!!」

その男にすがり付く

「……無理……ププ……もう我慢できねえ……」  
と言って男は大爆笑をした

「へ?」

意味がわからなかった

「ぶつ……わりい……お……俺だよ……ククク……しゅ……俊介  
だよ……」

ええ、すごかったですよ 感動の再開を夢に見ていたら 殺人者の  
気持ちがわかるなんて

「俊介君はどこへいったの……」

藤咲「アリエルは探し回っていた  
食堂や射撃場など居そうな所を一通り回り外へでてきた

細長い机が10個ほど並びスタンドライトが周りを照らし　そこには人だかりが出来ていた

みな赤い顔をして笑っていたり泣いていたり喧嘩なんかも起きている遠くからでもわかる　めちゃくちゃウルサイ所だろうと

「あ！ボス帰ってきたれすねえー一緒に飲みましょうよおー」

缶ビールを両手に走ってきたのは一応補佐官のヒュリスが近寄ってきた

「まだ仕事が残っているので・・・ヒュリス、俊介君をみませんでしたか？」

「らっき・・・いったの・・・しらよおー」

外の雑音とろれつが回っていないのが合間ってほとんど聞き取れない

「そう・・・」

といって辺りを見回す　誰かにビールをかけている赤い髪が目に入る

「あつはつは　ほらほらおいしいかあ？」

「すびばべんべびたあーもうのべばべん」

彼は運悪くシアンに捕まっていた

「シアンさん」

そんな彼女に勇気をもってアリエルは声をかけた

「きこえないーい 私がせつかく飲ませてやってるのにいー」

「シアンさん!!」

「ん? ああ、ボスも飲みましょー」

やっとこちらに気づいたようだ

「いえ、まだ仕事がありますので・・・俊介君を見ませんでしたか?」

「んーっと・・・ああ、コウなんとかは外で練習してるよぉー」

「練習って?」

「バレットの狙撃練習ですよ」

「なんかありましたあ?」

「ちょっとお願いがあります。昨日俊介君を見つけた場所付近に行つて貰えませんか? 私の知り合いが来ているはずなんです。見つけて連れてきてください。私は俊介君を探します」

「いいですけどおコウなんとかも同じ方向に行ってるはずですよ?」

いやな予感がした

「それはどの辺りですか!？」

「えーつと8・c5辺りだったかなあ」

「ありがとう」

アリエルはいうやいなや走り出した

「ちょっと・・・ボス!？」

シアンはただ事じゃないと思い 後を追っていった

「俊介・・・お前を殺したいと思った」

拳がプルプルしていた

「気にするな・・・お互い様だろ・・・な?それに投げ入れたの石だし・  
」

後ずさる俊介 迫る浩介

「俺はあのあと拳骨もらったしな・・・お互い様なら・・・受ける!  
天誅!!」

「ギャーッス!」

鈍い音がした



「おつし、スッキリしたあ　で・・・・・・・・なんか、ひさしぶりに俊介に会った気分だな」

頭を撫でながら肩を落とす

「はぁ・・・なんで来たんだよ・・・アリ・・・藤咲め・・・」

「いやいや、藤咲は悪くないってか俺の性格しってるだろ？俺が迫ったのだ」

と親指を立てる

「だからこそ釘さして置いたんだけどなあ・・・」

「まあそついうな！来ちゃったんだしな」

「だな　詳しい事は帰って聞くからとりあえずベースに行こうか」

「あ！忘れてた！！銃撃音！！さっき撃たれたんだ！」  
「といそいで身を伏せる」

「いやいや、いまさら伏せてもなあ・・・それに撃ったの俺だしな」

「へ？お前・・・銃なんか使ってたのか！？」

「うむ、俺の職は狙撃兵だ（まだなっていないけど）」

「・・・」

「まあお前なら他に見つかるだろうしな　なにかと器用だしな」

「ダメだ！」

真剣な顔つきで言った

「それだけはだめだ！」

あつけにとられた 浩介のこんな顔は初めてかもしれない

「な・・・なんだよ・・・急に」

「俺は頼まれたんだ！お前の両親につれて帰るっていったんだ！！だからそんな危険はだめだ！！」

「あ・・・たのか・・・ここに居ることも・・・話したのか・・・」

無言でうなずく

「なんで・・・なんでそんなことをしたんだ！！帰れる可能性なんかないのに！！」

「それは・・・俺はお前の両親ことを考えて・・・」

「もういい お前に何言われようが狙撃兵になって戦争を終わらせる為に戦う」

俊介はケースを持つと歩き出した

「それなら・・・俺は全力で止める・・・そして絶対元の世界につれて帰る！」

そう言つてその場に残つた

あとから藤咲が迎えに来てベースに浩介は向かった

「ん・・しよつと」

シアンはボスを追いかけていたはずが双眼鏡片手に廃ビルに登つていた

「夜のビルもなかなか 悪くないなあ・・お、みつけ！」

眼下に行く1人とその先にいる2人を見つける

「だれだろおゝ？コウなんとかと一緒にいるのがさっきボスがいつてた人かなあ？」

双眼鏡の倍率をあげる

「なんか口論してる感じだなあゝ あれ？コウなんとかが1人戻つていく」

「そろそろボスとかち合う・・あら、ボスもスルーした むう、これは何かあるなあゝ」

シアンは双眼鏡をしまいビルを降りた

「よう！バレット少しは上達したかあ？」

「・・・」

スルーされた

「ねーねー あ！敵だ！！」

スルーされた

「やれやれ」

とりあえず後ろからついていった

しばらく歩いた後

「シアン・・・」

「ん〜？」

「シアンはなんで俺がここに来たか、知ってるか？」

「んー うん。実はボスとの会話盗み聞きしちゃった」

「そっか、なら話が早くていいけど どうせさっきの奴も見たんだろ？」

「まあ・・・ね」

俊介は両手を頭の後ろにやり夜空を眺めた

「あいつさ・・・俺の親友なんだ。俺のために戻れないかもしれないのに来たんだ・・・」

「その元の世界？よく分からないけど・・・平和なんだ？」

「ああ、少なくとも俺のいる日本は戦争なんかなくすごく平和なところ・・・」

「そつか、んじゃわざわざ来たってことはそれだけ必要とされているからなんだね」

必要・・・かあ・・・

「いつものコウなんとからしくないなあゝってそんなに一緒に過ごしてないけどね」

「だな　いつもの俺なら来ちゃったものはしょうがない！で終わるはずなんだけどな」

「俺はこの世界で生きるって決めたのに・・・そんなときに命かけて俺を連れて戻るなんていうからさ・・・また元の世界に未練がでちまう・・・そんな俺が1番許せないんだ」

後ろからため息が聞こえた

「ぶあーか！簡単なことじゃん？ココでやりたいことやって、それが終わったら帰ればいい！これ最高」

「ははは なんだよそれ むちゃくちゃじゃん！」

少し気が軽くなった

「でも、ありがとなシアン」

「シアンたいちよくどこいったたんすか」

千鳥足でやってきたのはポールだった

「ちよつと迷子を捜してきたところ」

「誰が迷子だ！」

「のみましょーたいちよーいないからお酒がへりませんよあー」と、ポールはシアンの腕を掴んで雑音の輪に引っ張る

「コウなんとかもこーい！がっぷり飲んで忘れちまえ」

「そうだな・・・飲みたい気分だし行くか！」

ポールはシアンを シアンは俺を引っ張り輪に加わった

「うー・・・ん・・・いつっ・・・」

頭がガンガン痛む

「よ・・・よお・・・生きてる・・・かぁー・・・」

右から同じく苦しそうな声がした

「シ・・・アン・・・ここは・・・どこだ・・・」

「ここ・・・は私の部屋・・・かな・・・」

「なんでこんなところ・・・に？」

「お・・・覚えてない・・・の？私も・・・覚えてないや」

2人顔見て笑い出した

『いっつつつ・・・』

ひどい頭痛に2人とも悶絶する

「わ・・・わらかすな・・・あほ・・・」

「シアン・・・こそ・・・」

シアンは飲み物を取ろうとベッドから出ようとすると　あることに  
気づいた

「あ・・・あれ？・・・服・・・きてないや・・・」

なんですと！？自分に掛かってるシートとそつと覗きこむ

「え・・・俺も・・・きてない・・・」

2人の間に沈黙が起こる

コンコン

「シアンく入るよ」

やばい！アイラだ！！

「ま・・・待って！」

シアンは頭痛を覚悟で声を張った

「あゝわかったあ！」

ギクッ

「どうせ飲みすぎてひどい顔なってるんでしょ？」

2人してほつとした

「ま・・・まあね」

「まだ結構時間あるからさっさと薬飲みなさいね」

足音が遠ざかっていった



『ふう・・・あぶなかった』

2人揃えて安堵のため息をついた

「で・・・先に頭痛・・・なんとかしよ・・・」  
と言ってシアンがシーツを引っ張る

「ちょ・・・まって・・・」

「あ・・・そうだったね・・・目・・・瞑って？」

言われた通り目を閉じる ベッドから降りる揺れを感じた

「左に置いといた・・・から まだ待ってね・・・」

再びベッドにもぐりこんだ

「すごく苦いけど・・・すぐ効くから・・・」  
といってシアンは水で流し込んだ

「さん・・・きゅ・・・にがつ！」

めちやくちゃ苦かった 1度飲んだことあるセンブリ茶を思い出す  
ほどだった

10分ほどであんなに痛かった頭痛が引いていく

「大分楽になった」

「でしょ？毎度毎度お世話になってるからこの薬なかったら死んで

るねえ」

「で・・・どうしようか・・・」

「ん～・・・とりあえず確認だけど・・・何も覚えてないんだよね？」

「サッパリダネ」

「同じく・・・やっちゃったのかねえ？」

「ワカリマセン」

「むう・・・もし、やっちゃってたら・・・どー思う？嫌・・・かな？」

「やっちゃってたら・・・？嫌？嫌じゃない？どっち！？嫌な分けない　むしろ記憶がないのが腹立つ！　でもいいのか？逆に嫌がられる可能性が・・・ないか？キスされたし・・・でも・・・」

「だよね・・・ごめんね　嫌だってことは私が連れ込んだって事だもんね・・・」

色々考えていたせいで沈黙が　嫌だ　と判断されてしまった

「ち・・・ちがう！そーじゃなくって・・・俺はなんていうか・・・」

「いいいいいよ、私って女らしくないし　他の隊からも鬼シアンとか言われてるしね・・・」

「誰も女扱いしないし、私はこれでいいんだって思ってた・・・けど・・・やっぱり・・・」

いつものシアンらしくない女の子の部分を見た　とても愛おしかった  
今にも泣きそうなシアンを抱き寄せた

「シアンは十分魅力的な女の子だと俺は思うよ？少なくとも俺には  
そうだ」

「え・・・」

シアンは腕の中から俊介を見上げた

「まあなんていうか・・・今までどおりでいいと思うよ？」

「そっか・・・ありがとね」

そういつとシアンは目をゆっくり瞑った

俊介も意図に気づきゆっくり顔を近づけて・・・

ガチャ

「シアン隊長そろそろ・・・失礼いたしました！！」と言い残し勢  
いよく扉を閉めた

『・・・・・・・・』

ボールに殺意を抱いた俊介だった

なんとなく気まづくなり、そそくさと部屋を出て散歩をしていた。

（後から聞いた話によるとボールは医療室に行ったとか。シアンが

なにかしたらしいけど 怖くて聞けなかった)

「やあ 君が俊介君だね？」

後ろから声をかけられた

「そうですね・・・どちらさまですか？」

見た目は結構歳が行っていて優しそうな顔のおじいさん、いやおじさんだろうか

白衣を着ていて首には聴診器 右腕には大きな刺青のような物がある

「失礼、私はライズと言います。」

「ああ、医療長の・・・」

「そのライズです。ところで俊介君は射撃場を壊したらしいですね？」

「・・・すみませんでした・・・」

「いやいや、怒っているのではないんだよ むしろ逆だよ」

「ええ？どうゆう事ですか？」

「私は医療の時だけじゃなくて防具類にもフェイズを扱っているんだが、歳のせいか射撃場の壁面にもフェイズをかけるのをすっかり忘れてしまつてな 申し訳ない。」

ライズは深々と頭を下げた

「あの・・・」

「しかし、今しておいたから大丈夫、射撃場使ってもらっても壊れることはないよ」

「そうですか、ありがとうございます！ってそうじゃなくってフェイズって何ですか？」

「おや、ご存じない？そうだな、フェイズというのは・・・」

簡単に言つと魔法のようなものだ

治療に使つと怪我の治りが早くなる　物に使つと丈夫になるというもの

「そんな便利なものがあるんですね　さすが医療長です！」

「いやいや、このフェイズは誰でも持っているものなのだよ」

「え？それじゃ俺にも？？」

「あると思う。ただ使い方や力の大きさにもよるがね　生まれもつての資質もあるな」

「使い方・・・」

「シアンを知っているだろう？あの子は集中力が長けるフェイズを使っている」

「集中力・・・」

「狙撃はな 狙って撃てば必ず当る！なんて風に思っていないかい？」

「え・・・違うんですか？」

「自分が狙う様に敵も同じように狙っている。敵の位置を見つけ、すばやく構え撃つというのは言葉では簡単でも実際とは全然ちがう。当然手ブレもあるし風にも影響される」

「とてもじゃないがシアンのように指示も出し、援護し、複数の敵にも冷静に且、正確に撃ち抜く事は普通できないのだよ」

シアンのすごさが伝わってきた それと同時に俺もシアンの様になりたいと思った

「俺にもできるでしょうか？」

少し困った顔をした

「うーむ、皆持っているとはいったがこれは経験の積み重ねなのだよ」

「経験・・・ですか」

「シアンは・・・いや、よそう。本人の許可もなく過去を話す物ではないからな。とにかく自分が必死になってがんばればそれだけ身につくもの。とだけ言っておくかね」

「そうですか、ありがとうございました」

ライズは会釈をして近くにいる人に話しかけて行った

「フェイズ・・・か・・・」

シアンはそうとう悲しい過去を乗り切り身に着けたもの

「少しでも力になれるように練習あるのみかな」

俊介は射撃場に向かった いや、まずバレットを探しに走り回った

「なにがあつたの!？」

1人立ちすくむ浩介に歩み寄った

「俊介がさ・・・戦争を終わらせる為に戦うって・・・俺はどうしたらいい・・・俊介を連れて帰るつもりで来たのに・・・」

「でも、来るとき言つた様に帰れる可能性は・・・」

「わかつてる!!」

突然の大きな声に藤咲の体が強張る

「それでも!俺は俊介を連れて帰らなければいけない・・・約束したんだ!帰れる可能性は0じゃない すがり付いてでも生きて帰るって 2人で!!だから・・・俊介が戦争に行くのを止めてくれ!!」

何も言えなかった 私には責任があつたはずなのに 浩介を連れてきた責任もあるのに

沈黙のまま歩いた。ベースまでがとても長く、長く感じた ベースについた時ほつとした  
安心してしまった自分に怒りを感じた やり場のない怒り 逃げ出したかった

「浩介君・・・今日は寝たほうがいいと思います・・・部屋に案内します」

「ああ、ありがとう」

浩介を部屋に案内したあと俊介を探した 外から戻ってくるアイラを見つけた

「アイラさん 俊介君はどこですか？さっき部屋にいったけどいなかったの」

「俊介君はいまシアンと戦っていますよお」

アイラも参加していたのか頬と耳が真っ赤だった

「呼んできましようか？」

「いいえ・・・ありがとう」

そっぴい残して外に向かおうとした



扉に手をかけ少し開くと俊介がシアンと飲み比べをしていた

アリエルはそつと扉を閉めた 俊介に何を言えればいいのかわからなかった

朝になり補佐官ヒュリスに第2部隊と俊介、浩介を集めてもらおうにたのんだ

「皆さん彼は俊介君と同じようにこの世界にやってきた浩介君です」

浩介の紹介をしていた

「はじめまして、俊介とは昔からの仲です。よろしくおねがいします」

この場には俊介はいなかった 否、遅れてやってきた

「アリエル悪い おくれちゃった・・・浩介・・・」

「俊介・・・お前とちゃんと話がしたい」

「俺もそう思ってた アリエルの話が終わったらちよつと来いな」

「わかった」

アリエルに話を施す

「浩介君はとりあえずなにも話していない状況だからどこに担当するかわからないけど、なにか困っていたりしたら手を貸してあげてください」

アリエルは頭を下げた

「なに言っているんですか 困ったらお互い様ですよ。はじめましてポールといいます」

順番に挨拶をし、この場は解散となった

「こつちだ」

俊介はあの小部屋に案内をした。アリエル・藤咲と話をしたように

「まずは・・・どっちから話そうか」

「俺はきたばかりで何もわからない まずこの事を教えてくれな  
いか？」

「わかった」と、藤咲から聞いたこと、アイラやシアンやココの人  
たちの事も話した

浩介は黙って話を聞き、最後に俊介の気持ちを再度聞いた

「俊介は、どうしたいんだ？」

真剣に、そして力強く言った

「俺は・・・この戦争を終わらせる！皆が安心して笑っていられる様な世界に変えたいんだ！」

浩介はしばらく黙り目を瞑った。そして「わかった」と小さくつぶやいた

「俺から話せるのは・・・俊介、お前の両親のことだ」

俊介の顔が少し強張る

「とても心配していた。生きているって伝えた時すごく喜んでいた。だから必ずお前を連れて帰るって言ったんだ。だからこの世界にきて俊介に会えた事が俺には1番うれしかったんだ。本当に会えた、本当に生きてたって」

浩介は涙が出そうだった。俊介も同じ気持ちだった

「この世界の事やお前の気持ちを聞いたら俺の両親やお前の両親の気持ちを踏みにじるかもしれないけど、俺はお前と共に戦う！んでもって世界が良くなったらなんやかんやで元の世界に戻ってやる！」

「・・・むちゃくちゃだな・・・シアンも言ってた・・・だけど・・・それが俺達らしいな」

「ああ・・・がんばろうな」

2人は泣いた。しっかりと握手をして。顔をくしゃくしゃにして。2人はこの涙に誓った。

ドアの外からも小さな泣き声がした

心が救われたと　まだまだがんばれると彼女は心に誓った

## 第7話：戦争と誓い

それから数日間、2人は生きる為に 戦う為に 必死で学んだ

俊介はシアンやルナから狙撃を学んだ 休みの日には森へ行つて狩りなどをした

浩介は親が医者という事もあつてか治療に使うフェイズに長けていたようでライズに使い方などを教えてもらっていた

「よう！浩介 どうだ？修行のほうは」

ぐつたりと倒れこんでいた浩介を発見した

「む・・・むり・・・死んじやうよぉ・・・」

フェイズを扱うにあたつて無尽蔵に使い放題つてわけではなく精神力によつて量がきまり

コントロールによつて必要な分だけ引き出すことが重要なのだ

例えば5いる傷に対して7を与える、すると傷は治るが2が無駄に消費されてしまう

逆に5いる傷に3しか与えられないと傷は全く治らず3が無駄に消費となる

浩介の場合、精神力はかなりの物らしいのだがコントロールが皆無で5の場合50くらい与えてしまうのだ。よつてとにかく練習あるのみと腕に傷をつけ治すというスパルタを受けていた。そのせいで精神力は底を尽き、ぐつたりと転がる毎日だった。

「なさけないなあゝ少しは成長してるのか？」

と、からかうのが俊介の日課となっていた

「してるさ！師匠がいうには超出来損ないの成長から出来損ないの成長になったっていった！」

いやぁ・・・それって・・・どうなのよ？

「あ・・・そう・・・よかった？な」

「ってかお前はいいよなぁ毎日かわいこちゃんと一緒に手取り足取り腰取りってか？」

「そういうなよ・・・ルナときはすごくやさしいけどな・・・シアンの時なんか・・・」

想像するだけで青くなる　あの時の甘い雰囲気なんか跡形もなかった命を賭けるのは誰も同じだが、狙撃には命を預かることのほうが大きい　力が入るのも無理はない。ただ・・・1発でも外すと即グーパンチは辛いっす。しかも見えないボディーに・・・

「まあ・・・シアンさんはな・・・」

「うん・・・俺朝メシいくけどお前どーする？」

「んー　もう少しやってからにするわ」

「そか、がんばれ相棒」

「ああ、お前もな」

俊介は食堂に向かった

「今日ゝはゝなになぁゝ」

突然扉が開かれた 兵士が険しい顔をして走ってきた

嫌な予感がした

【2 - 4 エリアに衛生兵を！！敵数不明！！】

エリア2 - 4は第2部隊 つまりシアン達が戦っている所だった

「ちっ！応援要請してから何分たった？」

シアンは全く動けずにいた

「5分くらいです！」

「最低あと5分はかかるか・・・」

シアンはあと5分も耐えられるとは思えなかった いや、いまも耐えられているのが不思議の状態だった

いつも通り壁がなくなる前に配置につき、壁が消えるのを待っていた

「あと数秒で壁がさがります」

シアンにとって1番緊張する瞬間は壁が地面に埋まっていく時である。壁が下がり向こうが見えたときがSRの狙撃開始なのだ

いつも通り集中して構えていた 徐々に壁が下がっていく あと10mで敵兵スナが見える

「!!!!!!」

とつさに隠れるシアンと、立て続けに鳴る発砲音 シアンが先ほど居たところには土埃と儚くも崩れ去ったコンクリートが舞っている

「ぜ・・・全員隠れて!!」

今までとは違う いつもより早い開戦狙撃の発砲音 皆動揺していた

「なに!?!」

「わからん!!」

「はいぞ!!」

「急げ!!」

「こつちだ!!」

全員が困惑しつつも素早く建物に隠れたが、



「く・・・」

1人肩から血を流していた

「隊長！リックが肩を撃たれました！！」

シアンはなるべく体制を低くし、全くといっていいほど動かなかった  
なぜなら休み無くシアンの周りに弾痕を作っていくからだ

「リック、状態はどうだ？しゃべれるか」

「は・・・はい。ですが・・・ちょっと長く持ちそうにないです・・・」

リックはアイラにキツく縛ってもらったが、それでも大量に血が流  
れていく

呼吸も速く、足元には血溜まりが出来ていた

「サム！衛生兵要請を！！」

「了解」

「ポール！現在皆の場所と人数、状態を！アイラは見える範囲でい  
いから敵影確認を！」

「現在ポール、リック、アイラ、ベンが配置から15m北の廃屋に  
！リック以外は負傷者なし！！」

「サムとハボ！負傷しているか！？」

「こちらにも負傷者なし！現在サムが要請完了しました！現在配置から18m南のビル」

6人扇状に構えていたAR班は右の廃屋へ4人 左の倒壊したビルに2人隠れていた

「まずい・・・30m前方に敵影確認！人数不明・・・まって・・・あれはなに！？」

アイラは思考が停止したかのごとく黙ってしまった

「どうした！！なにがあつた！！！！」

シアンは撃たれたのかと思い、大声をあげた

「子供・・・子供が手に・・・手榴弾を持って・・・走ってくる・・・」

アイラが見ていた先には10歳前後だろうか、両手に手榴弾を持って走ってくる子供がいた

その数20人強 それぞれが泣き、喚き、暴言、無言と 駆け抜けて来る 1人が躓いた

ドーン

アイラの20m先で子供が吹き飛んだ

「そんな・・・なんてことを・・・」

アイラは目を背けることはしなかった しつかりと見て判断しなき

やいけなかった

しかし、目の前で起きた出来事に目を背けてしまった

「アイラ！―どうすればいい！！！」

ポールは怒鳴った　このままでは子供と共に自分達も吹き飛んでしまう

「ごめんなさ・・私には・・撃てない・・」

アイラは泣き崩れてしまった

「どけっ！！！」

ベンがアイラを突き飛ばし銃を構えて覗き込む

タタタタタ

タタタタ

乾いた銃声と爆音が鳴り響く

「ポール！左にいったぞ！！！」

「アイラはリックを頼むぞ！！！」

ポールは体勢を低くして銃を構える

小さな駆け音が次第に大きくなる

「く・・すまん・・」

タタン タタン

彼の前に現れたのは泣きながら走ってくる女の子2人だった 今はもう血溜りでしかない

ポールには妹がいた ポールが15歳の頃に妹は死んだ  
妹は父親に撃たれたのだ 父親は戦争に出て撃たれたショックで精神を病んでいた  
ベッドで過ごしていた父はいつも銃を手に怯えていた

15歳の彼には戦争の事や父親の状態なども理解はしていたし、戦争にも出るために訓練生として学校に通っていた。しかし8歳になったばかりの妹には理解はできていなかった。

まだまだ幼い妹には父親が恋しかった。久しぶりに兄と一緒に父親を訪ねる事が嬉しかった  
扉を勢いよく開け放った妹と銃声 銃と父 血と妹 ポールが目覚めたとき  
父親と妹はこの世から居なくなっていた 右手には硬く握られた銃と血しかなかった

彼は心を閉ざした 同情の視線が、声がした 誰一人と口を開くことなく訓練をこなした

噂に噂が合わさり、訓練生の間では「家族殺しのクレイジーポール」と呼ばれた

だが彼は気にもしなかった 静かに戦争を憎んだ 戦争だけを憎んだ

そんな彼が心を開いたのは18歳のときだった　いつも通り訓練場に1人いたときだった

「よう！ポールだっけ？私はシアン　よろしくね」

ポールはシアンの事は聞いたことがあった　が、いつも通りの冷やかしかただろうと相手にしなかった

「ふーん、私を無視するんだ・・へえ、いいんだあ？そんなことして？」

彼女はそう呟くと銃をポールに向けた　ストーナーをポールに向けて撃った

ダーン

「！！」

ポールは背中に痛みと衝撃で前に吹っ飛んだ　背中中は真っ赤に染まっていた

「それでも無視する？」

彼女は腕を組み、彼の顔を覗き見る　ふいに彼の腕　銃が彼女に向けられ

「・・・ってーな！！」  
パパン

「いつ・・・つてえー」

彼女の胸に緑色の円が2個出来ていた

訓練生に実弾は最終訓練でしか使えない それまではペイント弾だ

「至近距離から撃つな！！このばあか！！！！ペイントでも痛いんだぞ！！」

「お前がいうな！！しかもストーナーで！！下手したら死ぬぞ！！」

久しぶりにしゃべった しゃべり方を忘れたと思っていたのに

彼は恥ずかしくなり背を向けた

「ん？？どしたのかな？？耳が赤いぞぉ？」

「う・・・うるさい！」

彼女はまたストーナーを構え撃った 「うるさい」にまた力チンときたのか ただの悪戯なのか  
すると彼は素早く左にかわし 振り向きざまに銃を撃った

「お、おおっと！あぶなっ！」

彼女も素早くかわした

「ちっ」

「こっちの台詞だあ！」

開戦の合図なのか銃撃戦が始まった 終わる頃にはお互いが いや、  
彼だけが赤に染まった

「はあ・・・はあ・・・お前・・・噂通りだな・・・」

「ふいゝつかれたあー ポールは噂とは違うなあゝ」

2人は寝転んで空を見上げていた

「はは・・・家族殺しのクレイジー・・・か」

「私はこの目で見たものしか信じないからねえゝ撃ち合ってわかったよ」

「どうでもいいよ なんて呼ばれようが俺にはコイツだけでいい」

彼はAK-47を掴み、空に掲げた

「そう？分かり合えると思うんだけどなあゝ」

「お前は俺のことを知らないからそう言える 家族殺しだって違うとも言い切れない」

「うん 知らないよ？でも、君も私の事知らないでしょ？」

彼は黙るしかなかった シアンの事は凄腕のスナイパーくらいしか聞いたことがなかった

「私はね・・・」

彼女の過去と自分の過去を重ねた　彼女の過去は彼の過去よりずっと深く、暗く、重かった

「なあ・・・なんで・・・なんでそんなに明るくなれるんだ・・・？」

彼は彼女の過去を聞いて　いてもたってもいられなく聞いた

「んー・・・受け入れた・・・からかな？」

彼女はやさしい顔をしていた　眩しかった

「どうやって・・・受け入れたらいい・・・」

「誰かがやさしくしてくれたら家族は生き返る？過去が元に戻る？」

「誰も自分を救えない。救えるのは自分だけなんだ　それなら戦う為に救おう、生きる為に救おう、家族の為に救おう、平和の為に救おう、皆の笑顔の為に救おう　ってね思ったんだ」

彼女の言葉が心に染み込む　涙が心に　頭に　体に　全身に染み込む

「お・・・おれ・・・にも・・・できる・・・かなあ・・・」

「うん！必ず」

彼女の　シアンの心地いい返事で　糸が切れたのか　大声で泣いた  
心から泣いた



シアンは1年後に2エリアに　さらに1年後にポールが2エリアに移動した時

シアンは第2部隊長に　ポールがムリを承知で第2部隊に入ったのは言うまでもない

彼はA K - 47に新たに誓ったのだ

彼女の為に命を使つと　彼女は暗闇の中から救い　壁を壊してくれ  
た女神なのだから

「くっ・・・」

シアンは近くにあったコンクリートを投げた

地面に着く前に粉々になった

「一体何者！？それにこのコンビネーションと塔・・・」

「シアン隊長！」

声からしてサムだ

「どうした！？」

「子供・・・殲滅しました・・・被害はなし！ですが、居場所が完全にバレてます！！」

「こちらと同じ状況です！！このままだとリックが・・・」

「ごめんみんな・・・私は身動きがとれない・・・奴らの中に凄腕のスパイパーがいる」

シアンが言うからには余ほどの事だろう

「さらに塔3つ建てていた　そのせいで開戦が早まった・・・」

みな警戒しつつも自分の死期を悟っていた　いつも強気のシアンが身動きとれず意気消沈

応援呼んでも味方の死体が増えるだけだろうと皆わかっていた

ポールは叫んだ

「わかってているな！ただで死ぬな！！1人でも多く殺せ！！！！隊長に狙撃のスキを！！！！」

『おう！！！！』

「待つ・・・」

全員、リックも立ち上がり皆が飛び出そうとした　そのとき

ズドーン　ズドーン

この独特の発砲音　皆が足をとめた　遠くてもわかる　今まで聞こえなかった音

「えーマイクテストマイクテスト今日は晴天なり」

「シアン あの塔壊したらいいのか？」

「・・・・・・」

この声 こんな状況でのマイクテスト・・・ あいつしかいない  
あのまぬけ顔が浮かぶ

ズドーン      ズドーン      ズドーン

「あら・・・結構脆いなあの塔・・・」

遠くで塔が1個崩れて倒れた

「こ・・・このあほー！なんでコウなんとかが来るのさー！」

「えええ・・・やっぱアレだろ？主役は遅れてとうじや・・・」

「いまだここから撃ってるの！？真ん中の塔に凄腕のスナイパーがいるのー！あなたじゃ無理よ！」

俊介は移動しつつ狙撃をしていた

「ど・・・どこっていつてもなあ・・・移動してるし・・・スコから見て  
距離1・9km前後かなあ・・・？」

「1・9・・・」

おそらくバレットでしか届かない　いままでの発砲音からシアンは敵の銃を知っていた

「その距離ならまず撃たれないから塔だけお願い！慎重にね！！」

「あいよー」

気の抜けた返事に苛立ちを覚えたが来てくれた事に感謝した

「皆！あのあふおが塔壊したら私が現状把握、指示出すからいつでも動けるように！！」

『了解！』

俊介は落ち着き　自分なら出来ると信じて撃ち続けた　1分とかわらず2棟目を壊した

「あと真ん中だけだ・・・うおっ」

チュイン　　チュイン

「シアンの嘔吐き！！！！」

俊介はとにかく物陰に隠れた

「どうしたの！？」

「撃たれたじゃん！！あの最後の塔から撃つてきてる！！」

「ケガは！？撃たれたって・・・どこを！？」

「んーっとな いね。ちゅいんちゅいん音がしただけ いやあ・・・  
間一髪ですな うんうん」

全くこの男は・・・

「・・・このボケ      ！！！！そんなので撃たれたなんていつてたら私どんだけ撃たれてるんだあーーーー！！！！まじめに撃てこのあふ  
おーーーー！！」

「せっかくきてやったのに・・・この扱い・・・クスン」

と、小言を挟みながら近くのビルに登る

「先にあのスナ撃つな    ちょっと待ってて」

「あ・・・こら・・・」

ズドーン

止めようとしたが発砲音が2つ重なった

「しゅ・・・俊介？」

シアンは直感で起きて欲しくない事が起こったと悟った    返事は返  
ってこなかった

「おい俊介！！どこへいく！！お前が行っても死ぬだけだ！！！」

俊介は要請を聞いてすぐ愛銃を取りに射撃場へ向かった

ケースを引つつかみ扉を出るとそこには浩介がいた

「浩介・・・どいてくれ 俺はいかなきゃいけない」

「まだだめだ！今のお前がどれだけ腕に自信があるのかは知らないが今回はだめだ！」

「じゃあ・・・次があるのか！？みんな次はないかもしれない！！それが戦争なんだ！！！」

「わかってる！だけど今回は応援、つまりかなり危険って事なんだぞ！？？」

「だからこそ行くんだ！シアンを！アイラを！ほかの皆を助けるために！！！」

2人の怒声は響いていた 第2部隊からの応援はいままでになかった  
だからみな困惑していた 誰が行けばいいのか 状況が不明だから  
尚更だった

「そうか・・・わかった。なら俺も行く・・・お前が撃たれたらすぐ治してやる！」

2人は強く頷いて外への扉を開いた 誰も止めない 彼らの覚悟を聞いて止められる人はいなかった

痛いっていうか熱いっていうか・・・そんな感じだった 血が流れていくのがわかった  
倒れた俊介の脇腹から血が溢れ出ていた 背中からも血が出ている 為 弾は貫通していていた

「俊介！すぐ治してやるからな！！」

浩介は目を瞑り 小さく呪文を唱えた

「なんたらかんならホホイノホーイ！」

手に描いた刺青が青く光る その光を手のひらに集め 俊介の脇腹に注ぐ

数秒で傷は塞がったが血は輸血しないと戻らない 浩介に出来ることは塞ぐだけだった

「俊介！！傷はなくなっただぞ！生きてるか・・・！？」

頬をペチペチたたく

「ああ・・・生きてる・・・ただこれだけ言わせてくれ・・・」

「あ、おれなんていらねえよー親友じゃないか」

「ちがう・・・なんだその呪文はあ  
!!!!!!!!!!」

「ガーン・・・徹夜までして考えたのに・・・」

浩介は両手を地面について嘆いた

「そのことはあとで話し合おう!!それよりこっちだ」

ズドーン　ズドーン

スコープの先で最後の塔が崩れ落ちるのを確認した

「シアン!塔は壊した!援護するからさっさとやっちなえ!」

「わかった!」

無事なのは声でわかった　終わったら理由を聞こう　そう思い、彼は体勢を変えた

ターン　ズドーン　ターン　ターン

「ポール前方歩兵3　右2　距離15m　サム前方2　左後方2  
敵狙撃殲滅!」

『了解』



「俊介はサム達を援護！浩介は500m前進し壊れた赤い家で待機」  
『へーい』

いわれるままに浩介は走り出した 俊介も狙い撃つ

ズドン ズドン ズドン

「サムさん 左後方クリア 正面2」

「ありがとよ！」

サムは一瞬顔を出し手榴弾を投げ込む ドーンと音と血が飛び散る

「正面クリア確認 ナイスピッチング！サムさんならきつとメジャ  
ーいけるね！」

「無駄口はいいからサム、ハボは撤退 俊介は援護 ポール右2」

ビルから2人が出てくる 無事に退避できたようだ

「閃光！！GO！GO！」

ボールの合図でベンと共に飛び出し残っていた敵兵を仕留めた

「クリア！」

「了解、リックを運んで！！俊介もこっち援護」

ベンがリックを背負い ポールがアイラを引っ張る形で下がってくる

「撤退完了！浩介に治療してもらっています」

「了解 サムはベースに現状報告を！俊介は今のうちにこっちへ来て」

「あいさー」

とはいっても13キロもあるバレットを持って走るのは結構厳しかった

シアンがいるであろうビルの屋上についたとき10分経過していた

「はぁ・・・はぁ・・・しんど・・・」

「だらしない・・・私が見る限り敵影はいない 俊介はどう？」

「ふう・・・んーっと・・・今のところクリアかな？」

「んじゃちょっと休憩 俊介・・・派手な服装だねえ」

脇腹辺りは赤黒く染まりズボンまで縦に染まっていた

「斬新だろ？血が足りないなあ・・・あ、メシ食ってなかった！！」

元気みたいで心底安心した 来た事を怒るのを忘れ つい笑顔になった

「来てくれてありがとね」

「ああ、気にするな！」

俊介は親指を立て 笑顔で返した

しばらく見張り続けていたらやつと応援が来たようだ

「ボスからの命令により任務を引き継ぎますので第2部隊は帰還してください」

「今頃来てこれかよ・・・」

グチを言いながら全員で帰る だけど無事全員でベースに戻ることにがうれしかった

みんな口々にお礼を言ってきて来てよかった 助けられてよかった と思った

アイナだけは悲しい表情で「ありがとう」と言っただけだった

俊介は理由をシアンから聞いていた 子供をゴミの様に使うなんて許せない！

敵国も含め すべての人が笑える そんな世界を目指そうと がんばろうと

皆の笑顔に アイラの悲しみに

バレットに 誓った

## 第8話：死霊の谷と最後の楽園

「今回の作戦は失敗に終わりました」

電気もつけず暗い中 4つの影があつた

窓もなく コンクリート独特の匂いと冷たさが充滿している

「こちらのクズはどうなっている」

「特命小隊27 傭兵12 自軍13ですね」

「こつ沢山ゴミになるのはおもしろくないな」

「ああ、つまらんな 赤髪をどうする」

「作戦は悪くはなかったはずだ 予定通り封じること出来たが・

」

「長距離スナイパーですか」

「どうやら対物ライフルのようだな」

「新手の存在 やっかいだな」

「こちらには長距離銃はないからな 新人だと思うか」

「どうだろうな 数発外している事、イーターを狙撃した事を含めても」

「微妙だ」

「ああ、微妙だ」

「だが、ラットの情報では応援は2人だけだ」

「そのうち1人がRSSRか」

「余裕で2人なのか 見捨てたのか」

「ラットはどう見ていた」

「休暇中だったと すべて後日談らしいな」

「全く使えんクスが」

「予定通りエリアBは今まで通りにしてBZを取る事に集中だ」

「BZを奪えれば武器にも余裕が出来る」

「特命 使うか」

「いや、アレは良くなかったな 育成させろ」

「例のMoleは進んでいるか」

「あと数日だろうな」

「Moleの完成次第 BZを落とす」

「これ以上失態はまずいからな」

「ラットからの報告は以上か」

「ならばBZM作戦に急げ」

その声を最後に部屋は静かになり 影もなくなっていた

「どうですか？疲れは取れましたか？」

俊介が戦争に出て2日後の朝、アリエルに俊介とシアンが呼び出されていた

「うん 俺は元気だな」

「私はちよつと二日酔いかな・・・」

「シアンさんはいつものことなので元気と判断します」

俊介はあの戦争以降 戦争には出ていなかった

「それでなんの用なの？」

「私達が呼ばれたってことは例の戦争の事だよね？」

「その通りです 本部に来て欲しいと話がありました」

本部・・・どこだろ・・・

「やっぱりなあゝ固っ 苦しいからいやなんだよねえゝ本部」

シアンは何回が行ったことがあるようだ

「代わりの部隊長はポールさんに それと本部に来るにあたり2名の狙撃兵が貴方達が居ない間来ることになっています」

「こつゆうつ時しか人送ってこないね・・・」

「まあそつゆうものですよ どこも人が足りてないのでから」

なんかわからんけど わかったフリしとこう と、俊介はとりあえず頷く

「話わかってんの？俊介えゝ」

「わ・・・わかってる・・・よ？たぶん・・・少し・・・全然・・・」

「シアンさん 出発は夕方、それとアイラさんは大丈夫ですか？」

俊介は無視された 最近冷たい気がする

「そのことで少し話があるんだけど アイラは子供の件で少し参ってるんだあ もしよかったらアイラも連れて行っていいですか？気分転換になればと思って」

「そうですね・・・」

「んじゃ俺が変わりに戦争行くからアイラを連れて行くってのは？」

「わかりました アイラさん連れて行ってください。休暇の人を回します」

あれ？俺のこと見えてない？ 無視というかも空気扱いだな

「ありがとうボス ポールとアイラには私からいっとくね」

「お願いします では準備等ありますから話は以上です」

2人は敬礼して部屋をあとにした

「なあシアン」

「んー？」

「俺・・・アリエルに嫌われてるのかな・・・めっちゃ空気扱いだったし」

「たぶんあれだよ あふおが移るからじゃない？」

「コイツ・・・」

結局俊介はどこへ何をしに行くのか分からないままシアンを殴るために追いかけた



途中ポールやアイラを発見して 本部に行くことを伝えた

本部はセントラルバースという町にある 通称SBといわれている町で元バズクールやユースウエルの富豪や商人が多く住み 人で賑わっている 日本で言う首都である

白を基調としたアンティーク調の町並みに道はレンガを敷いており 観光スポットとしても有名である 中でも中央にある大護身噴水はカップルでその水を飲むと堅く結ばれるとか噂がある

2エリアからセントラルバースまでは馬車で1日なのだが歩きだと2・3日かかってしまう

この世界では移動手段は馬しかない ただその馬でさえ貴重なのだから4人はSBを目指して歩いていた 出発して1時間経過し辺りは薄暗くなっていた

「うう・・・重いよ・・・」

自分含めて4人分の荷物を背負って坂道を登っていた

「ほらががんばって!」

「ジャンケンで負けた俊介がわるいんだ」

「あ・・・私の分くらい持つよ?」

「アイラ 俊介を甘やかしたらだめだよー罰ゲームなんだからあ  
」

「そうそう！お前昔からジャンケン弱いもんな」

なぜ浩介が居るのかというと「俺だって女の子とイチヤツきたい！  
で無理やりついて来た」

「う・・うる・・っさい もうむり！休憩希望します大佐！」

そういつて荷物を降ろし座りこんだ

「しょうがないなあーもつと体力つけなよあ」

「あほか！！出発して1時間ずーっと全部持たされてんだぞ！十分  
あるほうだい！」

「それはお前が10回連続で負けるのがわるいな」

俊介はとてつもなくジャンケンが弱かった なぜなら決まってグー  
しか出さないのだ

「浩介がいらん事教えるからだろ！」

俊介は自分がグーばかりなのを知っていた 今度こそ裏の裏をか  
いて・・・でグーなのだ

浩介がジャンケンを言い出し こっそり弱点をシアンやアイラに伝  
えていたのだ

「しょうがない もう1回ジャンケンしよっか？」

「だね 俊介君がかわいそうだよ」

「で？今度は何出すんだ俊介？」

「絶対パー出す！！」

『じゃ〜んけ〜ん ぽい』

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「ほんと・・・」

「どうしようもないね・・・」

「ああ、逆にかわいそうになる」

「俺・・・二度とジャンケンしない・・・」

11連続グーで負けた俊介は坂を上りきるまで荷物を担ぐはめになった

「報告によると塔らしき物は2エリアのみ1度だけとなっています」

「まったく、やっかいな物を作ってくれたわい」

口に蓄えた髭を撫でる

「しかし非常に有効ではある」

歳若い軍師「ケントは頭の中でシュミレートをした

「どうゆう事だね？」

傷の多い初老「シュバル大將は軍師に尋ねた

「28エリアに工作兵を大量に投入し、一晩で谷へ上る階段のような物を作ればいい」

会議室がざわつく

「昔同じ戦略を立て、実行したが耐久力もなく上りきる前に撃たれ破壊されたではないか」

シュバルはその作戦に乗り、アサルト兵として向かったが上りきる前に撃たれ体に大きく傷を残した。その傷が実行をさせまいと疼く

「その話は聞いている。だがあまりにも目も当てられない製作だったと聞く」

口に髭のある老人「シムズは当時工作兵長として現場の指揮をしていた

「たしかにケントの言うとおり酷い物だったのう」

工作兵は150人で行い、人手不足や材料不足　さらには立て方すら決まっていなまま

実行された。まさに苦肉の策で壁が埋まる地響きで1つは崩れたとか

「今回は工作兵も十分用意できる程育っている、それに製作にあたり必要物資もあるだろう　製図も私が作ろう。事前にある程度作成しておけば組み立てるだけで完成となる。」

皆唸るだけで肯定も否定もしなかった

「このままずるずると味方を殺して武器をくれてやるのか!？」

「そう熱くなるな軍師　問題はほかにもある。誰が上りたい?これでは先ほどの特命隊と同じ運命を背負って突撃など誰も見たくないのだ。」

ケントは用意されている水を一口のみ、話を続けた

「そんな無駄死には私も見たくはありません。」

「ではどうするのです?」

「特殊急襲部隊（通称SAT）を作ります。」

今まで以上にざわつく中　シュバルは考えた

「みなお静かに!作るといっても今から育成を?」

「いえ、それではたぶん間に合わないでしょう。各エリアから厳選し、腕の立つ兵士を集めます。1週間合同訓練の後 作戦実行とする。」

「シムズ少将 替わりに送る兵士の人数は？」

「現在基準に達しているものは136名ですな 最大100名ほどなら代わりとして送っても大丈夫だとは思うがのう いかがかな？ ケイト」

「100名も居れば十分でしょう。シムズ少将はその100名の厳選及び所属エリアの選抜

シュバル大將には各エリアに作戦の詳細を プレタ少將には工作兵を集めていただき、さらに指揮官としてお願いしたい。私は各エリアからの人選及び製図に取り掛かります。」

そこまで言われて否定できるものは居なかった だが、やるからには徹底して行う

この作戦の結果次第では大きく変わるだろうと皆思った

「では解散」

ギシ ギシ ミシ ギシ

意識が遠のくそんな心地いい時に扉の向こうから床が軋む音が聞こえてきた

ここはヨービアという名前の村にある宿だ　首都セントラルバースとは違い人も少なく  
商人すらあまり立ち寄らない貧相な村ではあるが　村人は皆ここを最後の楽園と呼ぶ

村人は畑を作り　川から魚を捕り　山から菜を採り　お金に一切関  
わらない  
自給自足でのんびり暮らす　そんな村だった

俊介は田舎暮らしに憧れがあった。田舎に祖母がおり夏休みには浩  
介と共に毎年訪れていた  
ヨービア村の事を着く前に聞いていた為楽しみでやってきた

戦争をしている現在　兵士が来ることを嫌う人々も少なくないと聞  
いてはいたが  
それでも浩介は楽しみであった　この世界でベースと戦争だけしか  
見てなかったからだ

「ここがヨービアか」

「そう、最後の楽園ヨービア村」

時刻は21時頃だろうか　村からは松明の明かりといい香りが流れ  
てきた

「やつとか・・・」

浩介は村を見ると地面に座り込んだ

「浩介は体力なさすぎるぞ？」

「いやいや、お前・・・いつのまにそんなに体力ついたんだ？俺よりなかったくせに」

たしかに俊介は浩介より体力もなかった。この世界に来たときから体力増加したような気がしていた。だから浩介も同じだと思っていたが、違ったみたいだ

「鍛え方が違うのだよワトソン君」

「ほらほら、さっさといくよー？」

シアンとアイラが先の方から声をかけてきた 置いていかれたようだ

「メッシだあゝいっとなかったゝベッドだあゝ」

浩介はルンルン気分で走っていった 荷物を置いたまま・・・

「おい！荷物・・・やれやれ・・・」

俊介がしぶしぶ拾いあとを追った

「待て！！」

4人揃って村に足を踏み入れようとしたとき声がした



前後左右見るが誰も居ない

「あれ？」

「どこ？」

「シアン 上だよ」

アイラの言葉で皆が見上げる

門の上に2人の人間がいた 手には槍のような物を持っていた

「貴様らは旅人か？それとも兵士か？」

「へ・・・むぐっ」

俊介は瞬間的に兵士と言おうとしたらアイラに口を塞がれた

「ただの旅人ですよー」

シアンがそう応えると 門から1人降りてきた

「荷物を見せてもらっ まずはそれからだ」

俊介が持っている浩介の荷物を槍で示した

「どーぞどーぞ」

「ま・・・まて・・・それ俺の・・・」

俊介はリュックを開いた

「なんだこれは・・・」

見張りが中から取り出したのは1つの本だった

「ま・・・まあ・・・それは・・・なんていうか・・・秘法館といえますか・・・ねえ？」

つまりエロ本だ

「お前・・・こんな物持って来てたのか・・・どうりで重いはずだ・・・」

「ひ・・・引くなよ？」

「残念ながら・・・」

「浩介君も裸に興味あつたんだね・・・」

「も？つてことは・・・さては俊介」

ニヤニヤしながら浩介が近寄ってくる

「漢だから当然だ！だが、お前とは違う！なぜなら俺は直でしか興味がない！！」

「な・・・なんと・・・男だ・・・いや、漢だ・・・俺が間違っていた・・・」

地面に頭を埋める浩介の前に漢立ちをした俊介を横目に荷物検査は

進んでいく

「これで全部だよお　ね？武器なんかもってないよお」

「失礼した。最近なにかと物騒でな　交代で見張りを立てるように  
なったのだ」

「物騒？なんかあったの？」

「最近銃を我らに向けて食料を要求したり村娘を襲ったりとな　ひ  
どいものだ・・・」

「ひどい・・・」

「それって敵が侵入してきてるって事？」

俊介は聞いてみた

「それはありえない事だ　君は知らないのか？条例を」

「あ・・・あー、そいつは勉強嫌いであふおなんだよお」

反論しようとしたがシアンの目が今はしゃべるなど言っていたので  
黙った

「ま・・・まあいいが、旅人達も気をつける事だ　中は安全だから疲  
れを癒すといい」

「ありがとうございます」と、中に入れてもらい宿をとった

宿といつても空家1軒に泊まるという感じで 近隣の人から野菜や山菜、魚を分けてもらう かわりに朝の収穫の手伝いをするという田舎ならではのしきたりだった

ご飯を食べながらさつき俊介が止められた兵士と敵の話題を持ち出し俊介や浩介の勉強会が開かれた アイラは早々に席を立ち眠ってしまった

シアンはお酒を取り出し俊介と飲み始めた 浩介はお酒に弱く部屋に逃げこんだ

浩介は部屋に着いて愕然とした リュックからエロ本がなくなっていた

「あの見張り番め・・・」と何度もつぶやき 地面をたたいた

キィー・・・

扉が開く音に俊介は意識を呼び起こされた

「んん・・・だれ・・・？」

廊下の松明が人の形を映し出す 中からだと暗く誰か判別はできないただ手に持っている物が不気味に光った

「なに持って・・・」

言い終わる前にその影が近づいて物を振りかぶる

俊介はとっさにベッドから転がり 影とは反対方向に落ちた

「ちい！」

影はベッドに深々とナイフを突き立てていた

「この・・・」

俊介はその刺さったナイフを抜かせまいと左手で柄を押さえ顔面に  
渾身の拳を打ち込んだ

その影は扉まで吹っ飛び廊下の壁に頭を打ち付けて動かなくなった

「なんなんだ一体・・・あ！」

俊介はベッドに刺さったナイフを引き抜き、隣の部屋に向かった

廊下に出るとシアンも同じくナイフ片手に出てきた

「私はアイラを！」

「わかった！」

そついうとお互いに扉を蹴破った

「浩介！！」

部屋は真っ暗だった 浩介の上に乗っかりナイフを突きたてようと

振りかぶる男がいた

男はこちらに気づいていないのかなにか小言を言いながらナイフを下ろした

「浩介え　　！！！」

男はニヤリと笑みを浮かべ俊介の方を見た

「うーん．．もうお腹いっぱいだよぉ」

「！？」

男は何度も刺したが、血が滲むどころか布団の羽が舞う

「こ．．浩介．．？」

「もうちよつとお．．．」

ベッドの下から声がした

「し．．下かぁ　　！！」

男が発狂しながら下を覗き込み　ナイフを下に突っ込もうとした

俊介はすばやく近づき　ナイフを男の背中に突き立てた

「はあ・・・はあ・・・」

目の前には動かなくなった男 広がる血 震える手  
足から力が抜け 座り込んだ 初めて殺した感触が 手に 体に  
頭に伝わる

シアンとアイラが駆けつけてきた

「浩介はベッドの下」「無事」とだけ言えた

俺はもう元の世界には戻れない 「殺人者」になった

シアンとアイラが戻ってきた

「ふいふ」

「見張りも無事でよかったね」

見張りは気絶していた 他の村人の所をすべて見てきたが怪しい者  
はいなかった

襲撃してきた人数は4人だった そのうち1人が気絶（俊介が殴つ  
た男）他は死体だった

村人が集まり大騒ぎとなったが老人の一言「夜中にさわぐでない  
夜が明けてから尋問でもすればよい」で解散していった

村長は見張りをしていた人に気絶した男を拘束しろと命じ その場をあとにした

死体はいつの間にか村人が持ち去っていた

「俊介・・・大丈夫かあ？」

シアンは椅子に座っている俊介に話しかけた

「ああ・・・ただちょっと・・・受け入れるのに時間がかかる・・・」

俊介は手を見つめた 感触が残っている手を

「俊介のせいじゃないって・・・俺のために・・・正当防衛だったんだよ」

浩介はそれしか言えなかった

バレットで何人が殺してはいた だが、どこか他人のように思えた

自分の引き金で人が倒れ死んでいく ゲームのような他人のような感覚だったのかもしれない

感触も血も触れることはなかった ただ今回は違った

自分のこの手で人の命を絶つ その光景 その感触 その臭い その重み



全てが体に押し掛かる

「重いんだな・・・」

「うん・・・すごく重いよ」

シアンが手を握ってくれた とても暖かった

「私達はその重みをいくつもいくつも抱えて次世代へ平和を託す だけどね俊介抱え切れなかったら誰かに渡してもいいよ 私にせいにしてもいい 逃げ出してもいい 私はしっかり受け止めてあげるから」

「ああ、シアンさんの言うとおりだ。お前の重みは俺が半分持つてやる 俺達は親友だ 小さい頃から一緒に分け合った家族だろ」

「アイラもそうだよ？一人で抱え込まないで私に預けていいんだよ」

「そうだな・・・」

俊介は泣いた 仲間の暖かさに 大切さに 失いたくないと そのためにまだ戦えると

引き金を引けると その重みを決意で包み込んだ

アイラも泣いていた

アイラは子供まで戦争に しかも命を捨てる行為を無理やりさせら

れていた現実に  
目を背けていた そんな戦争を終わらせる事ができるのか？と自問  
自答していた

この仲間がいれば終わらせられる きっとできる そう思えた

「あり・・・がと・・・」

その夜はみんなで眠った それぞれの決意を新たに 仲間の有難さを胸に

朝はすぐにやってきた サイレンの音と地震が一般人にとっては目  
覚まし代りだ

井戸から水をくみ 朝ごはんの用意をする

朝ごはんを平らげた4人は収穫の手伝いに出かける

「さあゝて お手伝いに行きますかー」

「さつき決めた通り 正面は俊介君、右は浩介君、左は私達ね」

『はい』

玄関から出ると人が集まっていた

「おわっ」

「おろ？」

「どうし・・・なにこれ？」

「あの・・・なにか御用でしょうか」

アイラが聞いてみたが誰一人口を開かず 農具を持ち、睨み付けるだけだった

そこへ人だかりが割けるように中央から昨日の老人が1人でできた

「えーっと・・・村長さんですよね・・・？」

「いかにも村長だが・・・」

「なにかあつたのですか？」

「君たちがよく知っている通り 昨晚、襲撃があつたと聞いている  
しかし彼らは村の民だ！生き残った民が言っておつた！夕食に招  
かれたら殺されかけたと！！」

『！！！！』

4人はおどろいた 言葉がでなかった

「それにお前らは兵士じゃないか！！お前らのような奴がいるから  
戦争が終わらない！！」

村人が罵声を口々にし、農具を突きつける

「待ってくれ!!」

「私達は襲われたのよ!？」

「問答無用じゃ!村を守るのじゃ!」

村長の言葉で村人が一斉に襲い掛かってくる

ドゥン と大きな音に皆固まった

「し・・・シアン!？」

シアンの手には銃があつた

「や・・・やっぱり兵士ではないか!」

「そうだ!兵士だ!それがなんだ?私は戦争で戦っている、それは何の為に知っているか?」

「しるか!人殺しを正当化する英雄気取りじゃないか!」

「そうか・・・残念だ・・・皆」

村人達の体が強張る

「こんな村 さっさと出よう」

「ああ・・・」

3人で荷物をまとめ 村を後にした 誰一人口を開かなかった  
いや、最後に浩介が見張りにむかって「エロ本泥棒！」とだけ捨て台  
詞を放った

## 第9話：セントラルバース

朝露に濡れた草木が朝日に照らされキラキラと輝く 近くに川があるのか

時折魚が跳ねる音が聞こえる そんな森道を無言で進む4人の姿があった

俊介は昨日の夕食に聞いた村の事を思い返していた

「さっきはなんだったの？」

俊介はシアンやアイラに止められた兵士と敵の侵入について尋ねた

「んーっとね、まず敵が壁を越えられないって話をしようか」

「越えられない？」

「そう。もちろん私達もね」

「でも戦争で壁の出る位置は越えられるよね？まさか見えない壁があるなんてことは・・・」

「それはないない 位置は最前線のライン、つまりレッドラインに

よって壁の出る位置は変わるってのは言ったよね？」

俊介、浩介はうなづく

「んーそうだなあ・・・例えばこっそりそのライン越えて敵の中に潜り込んだら？」

「潜り込んだら・・・？スパイ？」

「まあスパイでいいけど・・・そのとき壁はどこに出来ると思うっ？」

「どこって・・・レッドライン・・・？」

「そのレッドラインはどこ？」

「最前線？」

「じゃあ最前線はどこ？」

「それは・・・アレだな　アレしかないな！な、浩介」

「ああ、アレだなうん」

シアンは諦めた　この2人は頭の回転が弱い　知ってていったけど

「やれやれ・・・最前線は敵と味方がぶつかる所でしょ・・・」

「だろうな！分かってたんだぜ」

「だな！知ってて言わせてあげたんだぜ」

「もうなんでもいいから聞いてね・・・」

2人そろって頷き 話を進めるように施す

「でね、壁ができました。さあスパイはどうなったでしょう?」

またクイズ形式・・・苦手です・・・

「孤独!」

「ソロデビュー!」

さすがにシアンも怒った 2人に鉄拳を食らわせた

「すびばべんでした・・・」

「ぼうじわけありまべんじだ・・・」

ぐったりと机に伏せて謝罪をした アイラがすかさず濡れタオルを差し出した

アイラはこうなるだろうと用意していたのだ

「スパイは死にましたとき。めでたしめでたし」と

「なんで!?!」

壁が出るのはわかるがなぜ死ぬのかわからない 見つかったわけでもなさそうだ



「なんで死ぬのかはわからない　けど実際そうなるの」

「ぜんぜん理解できないんですけど・・・」

「一説によるとね、壁は思考を分けているって言われててね　国それぞれ  
の考えを分断しているらしいの」

アイラが続きを話し出した　シアンはそこまで知らないのか忘れた  
のかのんびりしだした

「考え・・・」

「そう、国に相応しくない考えの者が侵入すると壁に殺される。っ  
て言ったほうがいいかな」

「でもそうなると思えを変えて敵対する国に亡命するのはどうなの  
？」

「いいところに気がつくね、その通り極僅かだけど亡命してきた人は  
いるよ」

「まるで人の心を読んでるみたいだね・・・壁」

「いい気はしないな　壁ごときに俺の心読まれるのは」

「そりゃ浩介はエロ思考だもんな？」

「うつさい！ー！」

「続けるよ・・・？その亡命も本当に危険なんだよ」

「そりゃ戦争してる所に行くわけだし・・・？」

「うん、そうじゃないの 朝起きて、さあこんな国捨てて敵国に亡命だ！なんて人いると思う？」

「・・・そうか、壁があるときに亡命したいって気持ちになったら・・・」

「そう。この国に牢屋や監獄なんかないのがその理由でもあるの。悪事を働いて捕まったら当然逃げたい、向こうの国に亡命したいってなるよね？だから牢屋なんかに入れてもすぐに死んでしまう。」

「なんか・・・悲しいな・・・」

「うん・・・でも良い事でもあるの。犯罪に手を染める人がめったに出ないって事。みんな死にたくないからね・・・ただ、私達もそうだけど戦争で人をたくさん殺してる。なのに私達は壁に殺されない。自国愛があるから殺されない けど・・・」

「自国の為に人を殺す民間人が・・・？」

「うん・・・最近増えているの」

「だからか・・・この村に見張りがいるのは・・・それじゃ兵士が嫌われるってのは、そんな考えの奴らが銃をいいことに好き勝手やってるから・・・？」

「そう、民間人は武器を持つてはいけないの それに命を懸けて戦

つてくれている兵士に抵抗はできないの　兵士がいるから普通に暮らせるんだってね・・・」

「そんなのあんまりだ!」

机を叩きつけた

「でもそれが民間人の暗黙の掟なの。それにもう1つ、兵士が嫌われるのは強制徴兵があるの。男女問わず10歳から15歳まで訓練生として銃を学ぶの」

「そんな・・・まだ子供なのに・・・」

「15歳になると審査されて兵になるか商人とかになるかが決まるの・・・義務なの・・・」

アリエルが言った国の事を思い出した。兵士不足のユースウェル武器不足のインガクス

朝のすがすがしい森を抜けると　そこには大きな湖があった　周りには所々岩がある  
水は透き通っていて底を泳ぐ魚の群れなども見えた

「綺麗な所だな」

足を止めて水の中を覗き込む　小魚達がじゃれあう様に踊っていた

「戦争しててもこんな綺麗な所もあるんだな」

「ここは妖精の泉っていわれているの」

「妖精？」

アイラは近くにあつた岩を撫でる

「昔、この湖には妖精がいて人々と支えあつて生きてきた。フエイズも妖精から学んだとか言われているわ」

「いまはいないの・・・？」

「ううん、いる。けど人間が戦争を始めた頃から人の目に映らなくなったの。心が汚れてしまったからかな・・・」

寂しそうに水音だけが木霊した

「休憩にしようか」

シアンの提案により湖を迂回して中ほどの大きな岩の所で休憩をとる  
俊介は少し離れたところにある小さな岩が2個あるところに近づいた  
一回り大きい岩に寄り添うようにもう1個がある

「なんか・・・いいな・・・」

「だねえ、その岩にも噂があるんだよ」

急に後ろから声がした

「シアンか、噂って？」

「片思いの人がその岩にお願いをしたら恋愛がうまくいくってね」

「へえどこにでもその手の噂があるんだなあ」

「俊介の世界にもあるんだ？」

「あつたね。観覧車の天辺でキスしたら永遠に結ばれるとか、カッブルで行くと別れる場所とかね」

「カンラ・・・シャ？なにそれ」

「観覧車、そうだなあ・・・こんなの」

俊介は近くにあった木の枝で地面に絵を描く

「へえく楽しそうだね」

「まあね ただし言うておくけど 男同士で乗るのはオススメできない・・・」

「なんで？」

「体験談からいうと・・・あ、そっちの方ですか って目でみられる・・・」

「そっち・・・ああ！俊介ってそっちだったんだ・・・」

「ちっげーよ！！単純に高いところが好きただけだ！」

「ふう〜ん？まあいいけど 乗ってみたいなあ〜そのシャランガン」

「・・・物覚え悪いのなシアン 観覧車だつてば・・・」

ここに1人決意を固め 1人の女の子を狙う獣がいた

「えーっと・・・アイラさん」

「ん？どうしたの浩介君」

振り返る時の髪揺れがアイラの笑顔を一層引き立てる

「あ・・・えーっと・・・その・・・よ・・・妖精！妖精について詳しく教えてください！」

妖精よりアイラの事聞きたいがとっさに出てしまった

「詳しくは知らないんだけど妖精はね、15cmくらいの大きさでね 小さな羽根があるらしいよ」

「へえ〜俺らの世界にも同じ様なイメージで描かれているなあ」

「そうなんだ？妖精と人は共存していたらしいの」

「共存？」

「そう、妖精は魚の捕り方や場所やフェイズを教え、人は知識や言葉を教えていたらしいの」

「Give - And - Take」

「ん？なに？」

「譲り合いつて意味 英語です」

「エイゴ？」

「うん 俺の世界では多くの国があつて国ごとに言葉や発音が違ったりしているんだ」

「へえーそれじゃそのいろんな言葉を使えるの？浩介君は」

「さすがに英語だけが精一杯ですよ」

「じゃあ私たちが話している言葉は何語なの？」

「それは日本語だよ あれ・・・？」

なんだ？この違和感 なんでも違う世界で日本語なんだ？ 異世界とはいえ、うまいこと日本語の世界に来るなんてことありえるだろうか？ 普通は言葉がわからなくて苦労するんじゃないのか？ もしかして日本語だと思ってるけど元の世界で聞くと違うように聞こえるのか？ それともこの世界は・・・日本なのか？

「浩介君？」

「あ、ごめん ちょっと考え込んでました」

「大丈夫？」

「うん なんか危ない方向に考えて行きそうだったから考えるのやめよっと」

「またエツチな事？」

「ち・ちがーう！」

「あはは」

「そんな事ばかりの男じゃないですよ！」

「そういえば、浩介君も俊介君みたいに敬語使わなくていいよ？歳同じだしね」

「そう？でも年上にはなるべく使うように言われてたからなあ・・・  
ってダメ！？」

なんとなく同い歳でうれしい反面 大人っぽさに落ち込む浩介だった



「ふう・・・」

額の汗を拭いペンを置く

寝ずに書いていたのだろう 目の下には隈ができていた  
扉をノックする音が聞こえた

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは軍師補佐官「ミラー准将だった

「丁度良かった。これをブレタ少将に渡してくれないか」

「了解です」

50枚にも渡る製図を手渡す

「コーヒーなど入れましょうか？お疲れでしょう」

「ああ、頼むよ」

部屋にある給仕場でコーヒーを入れる とてもおいしいとは言えない  
軍のコーヒーだが

眠気を覚ますには丁度いい苦さだった まだまだやることは多い

「どうぞ」

「ありがとう、ところでなにか用でも？」

「はい、シムズ少将より訓練生からの選抜が完了とのことです」

「そうか、ならば少し急がなくてはな」

コーヒーを一口のみ 引き出しから分厚い冊子を取り出した

そこには誰がどういう作戦を実行し、戦功を得たのか1人1人書いてある

各地エリアベースからの選抜がまだ3／1ほど残っていたのだ  
軍師「ケントは1つ1つ見比べ書き込んでいく

「ケントさん、私事ですが1つよろしいでしょうか？」

顔を上げず頷く

「あまり無理はしないでください。あなたが倒れたら作戦が台無しですよ？」

「ああ、わかっている。ありがとう」

ミラーはため息を吐いた ケントは決めたことは終わるまで休むことはないのは今まで補佐をしてきてよく分かっていた

「では、失礼しました」

ミラーが出て行った後、ケントは扉に視線を少し向けた

「これで何回目だろうな 休めと言われたのは」

軽く笑みがこぼれた コーヒーを一口飲み冊子に視線を送る

「そついえば・・・昔も親に休めと言われたな。受験前は特に」

頭の中に母親の姿が浮かぶ

「日本・・・か・・・懐かしいな」

各エリアベースでは大忙しだった

本部からの要請により主力が引き抜かれ新人が代わりに送られてくるのだ

各指揮官は部屋に籠もり 再編成に頭を悩ました

28エリアでは次々と工作兵が到着し材料が運ばれていく  
兵士以外の人は受け入れ態勢に必死で立ち向かっていた

「野外テントはいくつ必要なんだ？」

「わからん ありったけ作って置け」

「ですが材料の多さにそんなに建てられませんよ 場所がないです」

「むう、この際雑魚寝でもかまわんだろう とりあえず寝る場所を確保するのだ」

と、28エリアではお祭りよろしく人々が走り回っていた

ブレタ少将も同じく慌しく作業を進めていた

「1～5班でこのブロックを制作、5～15班でBブロックだ」

1～100班まである工作兵をうまく使わないと完成がどんどん遅れてしまう

次々に材料が運ばれてくるがそれでも同時に100班が制作に取り掛かれるほど材料はない  
かといって1つの作業に何人も居れば邪魔になる為、ブレタは頭を悩ます

「60～100班はまだ材料が来てない為、施設設置の手伝いをし  
てこい 1～59班のところで人手が足りないなら連れて行っても  
かまわん 材料が到着次第制作に取り掛かれ」

ブレタは落ちているネジ1つをつまみ上げ 頭上に掲げる

「いいか！このネジ1つでこの作戦が大きく変わる！！どんな作業  
でも気を緩ませるな！！決して崩れない階段を作れ！！勝利の地盤  
を作り上げる！！！」

ブレタ少将の大きな声に場は一瞬静まり 大きな歓声となって返っ  
てくる

【おお ！！】

各エリアから総勢65名が選ばれ本部を目指す 新人98名が各エ

リアを目指した

目の前に広がる風景はどこかの外国に思えるほど 優雅で綺麗な光景だった

行きかう人々はみな色取り取りの髪をしている 異国の祭りを思い浮かべてしまう

そんな中、田舎から上京したての若者如くキョロキョロしている者が2名いた

『うおおお すっげー』

俊介、浩介はいついなくはしゃいでいた 残念ながら修学旅行に來た中学生の間違いだった

「おーい あんまり離れると逸れるよおー」

シアンの声も行きかう人の雑音で消されてしまった

「おい浩介 あそこになんかいい感じの物があるぞ！」

「おお！いいこーぜ」

1軒の店に並んだ色取り取りのビンがあった 店の名は「エンジェリング」

「綺麗だなあゝ飲み物かな？」

「うーむ ビンだしお酒とか？」

「いらっしやませー」

店内からかわいらしい声で出てきたのは 声にとっても合う女の子だった

「これは飲み物ですか？」

「いえ、こちらは髪を染める液ですよ」

このSBでは一般的な品らしく セントラルパース 若者には1番人気なのだ

「ほう これで皆染めてたのか」

「俊介 やっていくか？」

「いいな だけどお金なんか持ってないぞ？」

「ふふふ こんなこともあるつかと・・・」

浩介はマイバックを探り 小さな袋を取り出した

「じゃーん！お小遣いいいゝ」

「おおー！つてこの世界の通貨じゃないだろ？」

「甘いな俊介よ こんなこともあるつかと師匠から貰ってきたのだ」

「いいなお前の師匠は 俺なんか・・・」

2人がそんなやり取りをしていると店員さんは困った顔をし 恐る  
恐る声をかけた

「えーと・・・いかがなさいますか？お客様」

『染めます！』

「あつれえ〜？」

シアンとアイラは消えた2人を探していた

「さっきまでそこに居ただけだなあ アイラそっちはどー？」

アイラは近くにあった木箱の上に乗って辺りを見回す

「んー・・・黒髪はいないよ 店内かな？そんな遠くに行くはずもないし」

「まったく 言ったそばから迷子だなんて」

シアンは木箱に座り 探すのに飽きたのかさっき買ったリングをか  
じる

「ほつとくわけにもいかないし　ここ広いし下手に裏道行くと・・・」

「そこまであふおじやないと思うけど・・・まあ集合場所言ってるし大丈夫だとは思うけどねえ　これだけ人がいるんだし聞けば行けるでしょ　集合場所行ってみる？」

「そうしょつか」

2人は集合場所〃大護身噴水　へと向かった

「んー・・・ないな」

「ああ、ないな」

薄暗い路地の迷路に迷い込んだ2人の影があつた

「うそつきか!!あんにやろうめ!!」

「いやいや、お前がショートカットしようって言ったせいだろ!」

「ノったお前も悪い!」

2人は買い物袋で殴り合いを始めた　2つの荷物がぶつかりガチャンと何かが割れたようだ

『あー!』



袋からは透明の液体とピンク色の液体が滴り落ち　甘い香りと鼻に  
衝く臭いが立ち込める

「ああ・・・高かったのに・・・」

「もったいない・・・俺の金じゃないけど・・・」

「はあ・・・なにやってんだろ・・・ここどこだよ」

「だな・・・どつかの裏路地ってくらいしか分からんな」

ジャリ

「ん？どうした俊介」

俊介は浩介に向けて口元に人差し指を立て　壁に背を当て浩介を手  
招きする

足音が大きくなり段々近づいてくる　音からして2人だと分かった

「挟まれた　後ろからもくるぞ」

小さな声で浩介に伝えると浩介は後ろを見張る

ちょうど1本道の真ん中辺りで挟まれる形だった

2人は武器になるものは持っていなかった　あるのは異臭漂う袋だけ  
10m先から人の形がようやく分かるくらいの暗さで　輪郭は見え  
る程度で影は止まった

「だ・・・だれだ！」

「やあこんにちは　こんな所をうろつく危ない奴をお金に変える善良な市民さ」

「どつちが危ない奴だよ・・・」

俊介は目の前の男から眼を離さず　浩介に向けてつぶやく

「おい、そっちも男か？武器はもってそうか？」

「いや、わからん　今は持ってたさそうだ」

浩介も目を離さず俊介と背中を合わせて　ひたすら目を凝らす

「俺達をどうするつもりだ！」

男は1歩前出た

「なあゝに　いい子にすれば痛くもなく表に出られるさ　ただちよーっと恥ずかしいだろうけどな」

「ウフフフ　またアレするのね。あんたも好きだねえ」

浩介の前にいるのは女だと声で分かった　話の内容は分からないがおとなしくすれば命には危険がないと思った

「さあ　どうする？裸で走り回る？それとも痛い目に合う？」

男女はそれぞれナイフを取り出した

シアンから聞いていた。住民や商人は銃を持つことが出来ない。一部の富豪を除けば兵士でないかぎり銃は持っていないので銃さえ持っていれば安全だと言われていた。

「相手はナイフだ。向こうは女がいる、やれるか？」

「やるしかないだろ。おとなしくしても真っ裸で町に放り出されるよりは痛い目がいいな」

「同感だ」

「致命傷だけは貰うなよ？治せないからな」

「おう。それじゃー先手必勝！」

『GO!』

そう言って2人は女の方に駆け出した

「ちょ 2人掛かりでって・・・」

女はおどろいて後ろを向き、走り出した。が、俊介達のほうがすでにスピードに乗っているため、あっさり後ろから腕を掴み引き寄せ転ばすことができた。

「弱いほうから叩く！これぞ虐めの法則也。」

浩介が女からナイフを奪い女の首下に突きつけた

「さあ、この女がどうな・・・あれ？」

「どうし・・・あら？」

「あいつは逃げたわよ。自分第一だもの。それより手離して貰える？」

女は観念したように座り込んだ

「うーむ、男の風上にも置けない奴だな」

「ああ、で どうする？」

「逃がしてなんて言わないわよ。好きにしていいわ」

「えらい潔いな」

「こんな事してるんだもの。いつかはこうなる事は分かっていたわ」

「それなら何でやめなかった？」

「やめるわけには行かないわ。生きるためだもの。私は逃げたのよ。私だけじゃない、この町の裏路地にはそういう奴らが沢山いるわ。」

「なにから逃げたの？」

「訓練から・・・だから兵士にも民にもなれなかった。人以下なのよ。」

10～15歳は兵士になるための訓練が始まる  
どのような訓練なのかは分からないがキツそうなのは明らかだった

「そんなに厳しい訓練なの？」

「そうなの。私の場合はちょっと違うけど裏で酷い目に遭っていた人ばかりだった。男は傷を隠せないほど殴られ、斬られ、それは酷かったわ。私の場合は精神的な傷。つまり・・・」

「いや、言わなくていい」

「ありがと・・・」

女は小さく震えていた。今の状況ではない、過去を思い出した事に震えているのが分かった  
浩介はナイフをしまうと立ち上がった

「俊介、これから本部いくし 上のやつらに会えるんだろ？」

「ああ、そうだな。そうするか」

「あんた達、兵士なの？」

「そうなのかな？訓練受けてないから分からんけど」

「職は兵士扱いだな」

「上に会えたら言つとくさ。訓練所何とかしてもらっよ」

「君の悪夢が少しでも晴れるように」

「うわぁ・・・俊介・・・よくそんな臭い台詞言えるな・・・引くわ

鳥肌たつた！」

「ばっかだな　こんな台詞があの状況を作り出すのだ！ここはイタリアだと思え」

「な・・なにい！？そうだったのか・・あのとき言えばよかったのか・・」

浩介はいつもながらひざを付き、落ち込む

「兵士には見えないけど・・ありがとう」

「んじゃ　俺らは行くから、次が起こらないように仕事考えなよ？」

そう言つて2人は歩き出した　が、すぐに戻ってきて「中央の噴水つてどこ？」と道を聞いて去っていった

女はしばらく2人を見送つた　そして薄暗い路地に身を隠し消えていった

## 第10話：同志と志願

「お、これだな」

「うわぁ カップルだらけじゃん」

名も聞かなかった女から言われたとおり進み、路地から出ると目の前に大きな噴水があった

町の白さに負けないくらい まさに純白で高さ5mほどある 天辺の台座から水があふれ外に撒く事無く静かに伝い 下の囲いに水を貯める

噴水の天辺には男女の像があり 男の方が片膝を付き左手を胸にあて 右手を差し出して小さな箱を乗せている プロポーズのようだった

女は両手を後ろに回して組み 困った様なうれしい様な そんな両方から取れる表情だった

噴水を囲むように階段がすり鉢状のように噴水を包み込み その階段に多くの男女が座り 肩を組んだり手をつないだりキスもしている そんな中で赤髪と銀髪の子を見つけた

「あ、いたいた」

「お、ほんとだ」

シアン達は噴水の池の淵に腰掛けて何かを食べていた

カップル達の間をすり抜けて駆け下りる

「おい」

「ん？あ、来た来たシアン あそこ」

「やっと来たかあ1発殴ってやるかな」

シアンは持っていたアイスをアイラに渡し 手を組むように指の骨を鳴らした

「ま・・・まで！浩介！！」

俊介は悪魔を察知し浩介に止まるように言った が、聞こえなかったようだ

「アイラア~~~~ ぶはつつつ!!」

俊介は目を疑った 目の前で起こった事実を受け入れられない逃げようにも足が地面から生えた様に動かすことができない口が縫い付けられたかのごとく声もだせなかった

「俊介君・・・覚悟はできたあ？」

ゆっくり悪魔は笑顔で近づいてくる その笑顔が足掻くことを諦めさせる

彼は声を出せなかった いや、悲鳴という声は出せたようだ

幸せな噴水広場にはふさわしくない悲鳴が響き渡った



「んじゃそろそろ本部に向かおうかあ？」

スツキリした面持ちでシアンは迷子に言った

『御意！』

背筋を伸ばし敬礼をしてその言葉に答えた

「もう逸れないでね？」

『御意！』

一糸乱れることなく後ろについていく男2人

周りを歩く人は異様なものを見る目で4人の姿を目で追った

それもそのはず 女の子が先頭にキビキビと後ろを付いて歩く2人の男

それに1名変な髪の色だった もちろん浩介だ

7色いや、何色使っているのか分からないくらいの色合いだった

俊介も染めていたが、ところどころ毛先を赤に染めただけでそのくらしい人は周りに多くいる

3人は一切髪には触れなかった そのまま放置して己の過ちに気づくことを切に願った

コンコン      ガチャ

「軍師、2エリア第2部隊長シアンが到着しました」

机に向かって地図や書類とにらめっこしていた軍師は顔を上げた

「そうか シュバル大将に同席をお願いしよう」

「わかりました」

補佐官「ミラーはシュバルの元へと急いだ

「なんかすつごい部屋だな」

「スイートルームみたいだ」

4人は応接室のような部屋に案内され 椅子に座っていた

古風ではあるが 豪華であるが眩しくない

壁には高そうな絵が飾っており 角には大きな旗が立てかけてある  
棚には古そうで なおかつ綺麗な銃がいくつも飾ってある

机には職人技ともいえる竜の彫り込みがしてあり 目には宝石のよう  
な赤い石が光る

「2人共、これから偉い人が来るから粗相のないようにね」

田舎者丸出しで辺りを見回していた2人に注意をした

「そうだよお 私だって1回しか会ったこと無い人なんだからね」

「へえ〜どんな人が来るの？」

「今回話す事は戦争の事だから 軍師がくるだろうね」

「軍師ってケントって名前だったよね？どんな人なの？」

「あら、アイラも会ったことなかったつけ？まだ30歳くらいの人で頭が良いらしいよ」

「まあ軍師なんだから頭はいいだろ・・・」

「細かいなあ・・・んで、10年前かな？前の軍師が28エリアでへまやらかして責任とらされて逃げ出したんだ。それで1年後くらいに軍師として選ばれたのが今のケント軍師なの」

「28エリア・・・そういえばそんな事あったね」

「ん？28エリアってなんかあるの？」

「ま・・・まあそこは置いておいて、、今の軍師はすごいんだよお」

「すごいって？」

「1人1人意見を聞いて1つ1つ問題を改善してくれるの そのおかげで今ベースでおいしいご飯が食べれるし、お酒も飲み放題なさ」

「へえ」

アイラはクスクスと笑い出した

「どうしたの？アイラ」

「ちょっと思い出したの シアンがね、そのお酒をタダで寄せこせて抗議しに本部にいったね、そのせいでお酒がタダになったのでもそのときのボスに怒られてね シアンに禁酒命令したの。あのときは皆ピリピリしてたよ シアンに殺されるんじゃないかってね？」

廊下にまで笑い声が漏れるかのごとく3人は笑った

「ちょっと アイラあゝそんな事思い出さないでよあゝ」

シアンは耳が真っ赤になった

「ほんつとにシアンは酒が好きだなあゝ」

「俊介だってガッツリ飲むくせに」

「ちょっといいかな？」

4人がビクツつとなり 後ろを振り返るとそこにはローブを着た人が立っていた

「あ・・すみませんケント軍師！気づかなくて・・」

シアンとアイラは立ち上がり敬礼をする 俊介達も慌てて同じように敬礼をした

「いやいや、お待たせしてしまった様で 申し訳ない。」

「いえそんな・・」

軍師は座るように施し 自分も椅子に腰を下ろした

「もう少し待ってもらいたい。シュバル大将も来られるので」

「シュ・・シュバル大将も来られるんですか!？」

「ええ、なにか問題でも？」

「いえ、まさか私がこの国のトップに会えるなんて思ってもみなかったもので・・」

アイラは縮こまって そわそわしだす

「トップってことは国王なんですか？」

俊介はなぜかこの軍師に親近感を抱いていた 黒髪だったせいかもしれない

「そうだな、時期国王とでも言っておこうか」

「こら！俊介は黙ってなさい」

シアンに脇腹を殴られた

「ははは、相変わらずだなシアンさん」

「あははは・・・軍師もお変わり無いようで」

「いたいなあ・・・相変わらずってことはお酒抗議で会ったおふつつ  
！」

「うつさい！！」

「はははは その通りだ。シアンさんと初めて会ったのがあの抗議  
だな。あの時は驚いた」

「わ・・・忘れてください・・・」

「いやいや、いい思い出ではないか」

そう言ってケントは俊介を見た

「え・・・えーつと・・・なにか？」

「俊介と聞いたかね」

「そうですけど・・・あ、ちなみにこっちは浩介です」

浩介は頷く 浩介はこういうお偉い様は苦手だったので極力気配を消す癖があった

「俊介に浩介か・・・アリエル・・・いや、藤咲さんは元気だったかい？」

「ええ、最近冷たいです・・・けど・・・あれ？知っているんですか！？」

「ああ、私はケント。健康の健に、人で健人と言う よろしく同志達よ」

2人は声が出なかった まさか他にも それも10年も前からこの世界に来ていたなんて

「驚いたかね？」

「それはもう・・・驚くに決まっていますよ・・・10年も前から・・・？」

「そうだ。ところでシアンさん達に聞かれてもいいのかな？」

置いていかれていたシアン、アイラは急に話を振られ 慌てながらも応えた

「えと、私は知ってます。アイラは・・・」

「あ、私は直接聞いてないですけど・・・なんとなく分かります」

「シアンは盗み聞きしてましたよ」

今までの流れで分かる様に 脇腹に肘がめり込む

「楽しそうに過ごしていてなによりだ。色々聞きたいところだが、そろそろ・・・」

ノックの音がしてケントの応答により1人の男が入ってきた

「こんにちは 第2エリア第2部隊の諸君。私はシュバールです」

顔に大きな傷があり体軀も180cmは越えているだろう 筋肉が盛り上がっているのは 窮屈そうな制服にはメダルの様な物が多く 服の上からでも分かる ぶら下がっている

「遅かったですね。なにかあったのですか？」

「なに、サウスのチューズの相手をしていただけだ。全く話が長かったらありゃしない。」

「その為の正装ですか。確かにあの方は無駄話がお好きのようで」

「ケントや、この麗しい方はどなたです？」

「彼女がシアンさん 例の子ですよ」

シアンは立ち上がり敬礼をする



「第2エリア所属第2部隊長シアンであります！」

「なるほど、君が例のお酒好きの鬼神シアンさんですか 両親共君のようにお酒が好きだったのをよく覚えている。腕も受け継いでいると聞いている。しかし、両親の事は残念だったな・・葬儀に出れなかった事はすまないと思っている。」

「あ・・はい。シュバルさんの事は両親から聞いてます。両親がお世話になりました。葬儀のことは気にしないでください。貴方もひどい怪我だったので」

シュバルも当時は戦争の指揮官として前線に出ていた

「そうだな、あれから8年か・・早いものだな」

シュバルは顔の傷をなぞる

「シュバル大将、そろそろ話をしてもよろしいですか？」

ケントはタイミングを計り 話を切り出した

「おお、すまんかったな 進めてくれ」

「先日の戦争であつたことをすべて教えて貰えますか？シアンさん」

シアンは自分が体験した事、アイラ視点からの事、俊介浩介が来てくれた事を全てを話した

「そうか 他エリアからの報告ではそのような建物はなかった。試

験的に作つたと見えるな」

「ええ、ですがこうも見られます。狙いはシアンさんを殺す事だと」

「なぜそう思う？」

「全エリアで攻防が繰り返され一進一退を繰り返す中で2エリアのみ押し進めています。シアンさんを殺す、もしくは動きを封じる事で一気に攻め立て制圧をしようとした、と。」

「私もそう思います。」

アイラは事実を言った

「シアンは2エリアの中でも群を抜いて腕がいいです。正直シアンがいなかったらとくに死んでいます。」

「ちょっとアイラあゝ そんなことないって それにあの時は俊介達のおかげでこうして生きられた訳ですから」

シアンは耳まで赤くなった いままで冗談として受け取っていたが面と向かって真剣に言われたのは初めてだった

「ふむ。ケントのその作戦ならば成功していた が、君達の活躍によって最悪の事態は避けられた」

正直、無我夢中で助けに向かったから怒られる事はあっても褒められる事ではないと思っていた

「いえいえそんな・・・俺はただ助けたかっただけですし・・・」

「その心が大事なのだよ。ところで君はどこの出身かね？S B 訓練所ではなかるう？」

「あ・・・えーっと・・・」

答えて良いのか誤魔化せばいいのか分からなく答えに詰まっていると ケントが助け舟を出してくれた

「彼らは私と同じビブル出身ですよ」

「ほう。たしかに言い出し難いな。悪いことを聞いてしまったかな？」

「いいえ 気にしないでください」

なにかよく分からないが助け舟に乗り込む

「それではこちらからも本題といこうか ケント説明をたのむ」

「本題？」

「これはあくまで個人の選択になります。命令ではありません。今回28エリアで大規模な攻略を行います。君達には特殊急襲部隊に入るか否かを決めてもらいたい」

「特殊急襲部隊・・・」

俊介達は映画でなら見たことがあった 空から 陸から 次々突破して犯人を捕まえる

まさに憧れの存在　それになれるという選択　なりたい！是が非でも！！

「なり　　」

「28エリアといえは死霊の谷と呼ばれる所です。危険がとても大きい。これは最後の賭けのような物かもしれませんが。ですが、私は皆さんの力を信じています。」

ケントの言葉によって阻まれた　が、俊介は死霊の谷と聞いて説明聞いてから答えようと思い直した。

「あの・・・死霊の谷ってどんなところなんですか・・・？」

ケントは死霊の谷と今回の作戦の内容を細かく説明をした

「　　で、現在進めている。」

シアンは黙って頷き　立ち上がった

「私シアン第2部隊長は特殊急襲部隊に志願いたします！」

正直説明を聞いて怖くなった　まだ1度しか戦争に出てないせいもある

俺が役に立つのか分からなかった　けど　気が付いたらシアンに並

んで志願していた

話が終わった後 部屋に案内されていた

先ほどの応接室ほどではないがそれでも高価なイメージができる部屋で

星3つのホテルに泊まったような 普通に旅行で来たらはしゃぎまわっていただろう

そんな部屋で静かに ペンの走る音とため息だけがしていた

「なあ・・・俺はどうしたらいいんだ？」

ベッドに横になりながら椅子に座ってなにか書いている相棒を見る

ペンが止まり俊介は浩介のほうを見た

「それはお前が決めることじゃ？」

「そうだけど・・・なんで俊介は志願したんだ？」

少し考えた が、いい言葉が見つからなかった

「なんでだろ・・・ノリかな・・・気づいたら志願してたからなあ・・・」

」

「やっぱアレか。シアンさんの為か？」

ニヤけた顔で俊介をからかう

が、俊介は「それもある、けど・・・」といって黙ってしまった  
浩介もアイラの事を考えてみる

「アイラ・・・か・・・」

しばらく無言で部屋はさっきと同じ音しかなかった

数分後ノックと共にシアン、アイラ、お酒さんがやってきた

夜遅くまでさきほどとは変わって騒々しかった

アイラも浩介と同じように保留にしてもらっていた

「ねえシアン」

「んー？」

返事と共に小さな欠片を枠にはめ込む パズルをしていた シアンの私物のようだ

「なんでシアンは志願したの？」

「そうだなあ　なんていうか・・・特殊急襲部隊って名前がカッコイイから？」

悪戯な顔でアイラにウィンクをした

「まあ、人が真面目に考えてるのに」

「アイラ、これだけは言っておくけど、今まで長いこと一緒にいたけど今回は自分の意思で選んでね。今回の作戦は聞く限りだとかないと思う。けど、その分危険が大きすぎる。

自分を守ることしか出来ないかもしれない。自分を守ることすらできないかもしれない・・・」

アイラは真剣に言葉を飲み込む

「だから・・・私はね、できればアイラには残ってもらいたい・・・うん、引退して結婚して幸せになって欲しい」

シアンはアイラの目を見つめた　アイラも見つめ返す

「それは私も同じだよ・・・」

ふいにシアンは立ち上がりアイラの手を引いた

「じゃー早く戦争終わらせなきゃね？ってことでお隣さんもきつと暗くなってると思うし、絡み酒と行きましょー」

2人が出て行った部屋には完成することのないパズルが残されていた

10歳から15歳までは訓練させられる それは性別問わない 15歳になって初めて2択の道を決められる それがこの世界のルール 法律である

だが、そこには細かく規定がある。例えば、商家の子供が3人居たとなると女の子が優先とされ商家を継ぐこととなる。他の2名は例外はあれど強制的に兵士となってしまう。

1人しか子供が居ない場合は15歳で選択をすることができ 兵士を選んだとしても死にくい工作兵や事務管理、衛生兵、調理兵、などに行く場合が多い。

女で兵士になった者は1つの待遇がある それは引退である

ある一定の期間戦地にすることで引退を可とされている。引退後は兵士訓練の教官や結婚して夫の仕事のサポート、子供を生むことに専念することとなる。

そのため教官には女性が多い 訓練所はSBだけではなく各地に10ほどある

SBは15歳を越えて兵士になることになった者が行く所となり一度入ると卒業まで一切外に出ることはできない それがゆえに稀に脱走兵が出ることとなる

脱走兵が出るとSBの訓練生総出で探し出し焼印を施す そして開放するのだ

開放された脱走兵は家に戻ることはできない その家族も同じよう



に焼印を押されてしまうからである　焼印は脱走兵の証として民以下　人以下の扱いとされている  
開放することにより民の抑制としていた

脱走兵は長生きができない　それもそのはず　民からは蔑まれ飢えによる餓死

犯罪による「壁」からの制裁により人生を終える

それでも脱走兵は減ることは無い　皆S B 訓練所に疑惑を抱いているが誰も言えない

なぜならS B 訓練所には国王「セルケード」ユースウェル」が自ら指示をしている

だが、あまり人前には出て来なく　死亡説も絶えない　時期国王誕生が囁かれていた

インガクス国は強い者ほど上位階級が与えられ国王が選ばれるのだが、ユースウェル国はユースウェルの名を持つ者が国王となる　しかしセルケードに子供はおらず　時期国王は国民によって選ばれることとなる　最有力候補はシュバールであった

「ケント、ビブルは優秀な人材が多いのか？たしかアリエルだったか、彼女もビブルだったろう」

「そうですね、アリエルさんもビブルです。以前も言いましたがビブルの事は誰も覚えてないんです。そもそもビブルという名ではないでしょう」

ケントの部屋にシュバールは訪れていた

「ふむ。しかしビブルの者は皆黒髪黒目で急に現れるな。私の中では1番の謎だよ。もしかするとどこか別の世界から……」

「考えすぎでしょう。今日はもう遅いですしそろそろ眠ったほうがよろしいかと。明日には兵士が到着するでしょうし。」

シュバルは「そうしよう」と言葉を残して部屋を後にした

「やれやれ……ビブルではなく正しくは地球。それも日本限定だなんていえるはずも無いな……」

閉じられた扉に向かって呟いた

「1番の謎か……それは」

最後の独り言を呟いて部屋の明かりが消えた

## 第10話：同志と志願（後書き）

ゆっくり進めて行きたいと思います。

## 第11話：仲間と過去

「うー・・・ん・・・」

シアンとのもはや恒例となってしまうた飲み比べにより朝の目覚めは最悪だった

「またこのパターンか・・・」

記憶が曖昧で体が重く、頭痛も酷い 常備薬として二日酔いの薬を持つはめになっていた  
重い体をむりやり持ち上げて布団を取る

「・・・」

今回は服を着ていた が、へんな物が1つ多かった いや、物ではなく人なのだが・・・

「だれ・・・？」

右を見るとシアンとアイラが同じベッドで寝ていた

左を見るとベッドの下から足が出ている 浩介だろう

「まあいい・・・とりあえず薬のもう・・・」

椅子に腰を下ろして水で一気に流し込む 乾いた体に染み渡るように冷たい水が心地いい  
しばらくそのまま頭痛が治まるのをまつた

「ふう・・・で、だれだろ・・・」

ぼやけた頭で見ていたから性別すら分からなかったが 今はよく分かる

残念ながら男だった

「なんで男が・・・いや、女よりマシか・・・」

起こすのも面倒だと思いそのまま椅子に座って暇を持て余している  
と 鈍い音と共に呻き声がした

「うう・・・いたい・・・」

「浩介・・・相変わらず寝相悪いな」

体を器用に反転させ顔だけベッドから出した

「よう 俊介 またベッドの下で寝てたのか・・・」

「なんでそこに入るのか過程を見たいな」

「俺もだ。たぶんいつも布団で寝ているからベッドは落ち着かない  
んだろう」

ベッドの下から出る様子も無く浩介はそのまま会話をしていると  
ガバツと跳ね起きた奴がいた 謎の男だ

「あれ・・・ここは・・・ぎゃあああああああ！！！！」

「なんだ・・・？」

「しゃ・・・しゃべったあああああああつあああ！！！」

彼は何度も転びながら自分の上着をひつつかんで部屋を出て行った

「浩介が生首にでもみえたんだろ」

「だからか。あんなに楽しく飲んだのにな」

「ん？あいつ知ってんのか？」

「覚えてないのか・・・たしか・・・リッキーだったかな？訓練学校の卒業したてだったはず」

「ふーん 全然記憶にないな。誰が連れてきたんだ？」

「・・・お前だよ・・・」

「・・・」

「まあ・・・置いておいて、全然起きないなこの2人」

あの叫びでも微動だにせず気持ちよさそうに寝ている2人

「起こすか？」

「そーだな 暇だしちょっとからかうか」

俊介はベッドの横に立ち シアンの耳元に口を近づける

なにかつぶやいた 浩介には聞こえなかったが シアンが飛び起きた

「んにゃ!!」

「お、起きた起きた。朝だぞー」

「なんつつ起こし方す・・・頭いたあ・・・」

シアンは前のめりに倒れこみ 頭を抱える

「ほら、水と薬」

手渡すとすぐに飲み干し すぐ横になる

「俊介・・・なに言っただよ・・・」

「企業秘密だ 浩介もアイラ起こさなくていいのか？」

浩介は思い出していた。俊介が言っていた「臭い台詞が良い」と言っていた事を

頭の中にいろいろ台詞が出てくる 浩介はアイラの横に歩みだした  
深呼吸を繰り返し

アイラの耳元に口を近づけた そして・・・

「おはようマイハニー 宝石のような目で僕を見つめてくれないか？」

俊介は凍りついた シアンも凍りついた

「あれ・・・起きないな・・・ってどうした？」

浩介に2人の冷たい視線が突き刺さる

「それはないだろ・・・」

「浩介・・・気持ちわるい・・・」

「だつて・・・」

浩介はそういい残してベッドのしたに逃げ込んだ　涙目だった

アイラは実は起きていた　あのタイミングで目覚める事はできなかった　否、したくなかった

3人の説得により浩介が出てきたのは1時間後であった

「さきほどは失礼しました!!」

新兵のリッキーは4人の前で頭を下げた

「気にしないでいいぞ　リッキーだったっけ？」

「そうです！AR訓練を卒業して間もない新兵です！」

「おろ？俊介の知り合いなんだあ？」

シアンも記憶にないらしい



「残念ながら俺も覚えてないんだけどね 昨日飲んでいるときに俺が連れてきたって浩介から聞いたただ俺、変なこと言ってた？」

「いえ、楽しく飲ませていただきました！あ、それと伝言を授かって来ました！シアン第2部隊長及び俊介殿、本日一五〇〇時に第1演習場に集合とのことです」

「もしかして例の件かな？」

「たぶんそーだろーね アイラと浩介はそれまでに・・・」

2人は黙ってうなずいた

「あ、それと浩介殿に別件で伝言がありました！髪を染め直して来いとシュバル大將がいつてました。以上になります！」  
リッキーは敬礼をした

「あははは だってよ？浩介 誰も触れなかった事を指摘するとは、さすが大將なだけあるな」

「ええええ・・・てつきりイケてるんだと思ったのに・・・」

浩介はまたしても膝を折る羽目となった

「ほんと・・・さすがだよねえ・・・」

「だね・・・浩介君・・・15時まで時間あるし町にいこっか？気分転換にもなるだろうし」

「ふあい・・・」

情けない返事と共にアイラと浩介は町に向かった

いつも人が多く行きかう町、セントラルバース

しかし、今日はどこか違った雰囲気だった。町にはそこらじゅうに紙が落ちている。

紙を片手に話し込んでいる人が多々見られ、店を仕舞う所も少なからずある

子供が歩く姿はなく、周りを見ながら足早に移動する大人が多かった。

「なんか昨日と雰囲気がちがわない？」

「そうだね。きっとこのペスト誌のせいじゃないかな？」

アイラは落ちていた紙を拾い上げた

「ペスト誌？」

「うん。えーつとね、いろいろな情報を載せてる紙かな？普通は3日ごとに売っているんだけど、たまに即日に無料で配ったりしてるの」

「ふーん、新聞みたいなものかあ　で、なんて書いてるの？」

「ちょっとまってね　なるほどね。今回の作戦で兵士が行った

り着たりしているでしょ？だから大規模な戦争が起こるんじゃないか、そんな感じのことが書いてあるよ。」

「だから皆周りを伺っているんだね」

「それだけじゃないかも」

「どうゆうこと？」

「大きな戦争があるときつてね、裏路地に隠れている脱走兵なんかも表に出てきて騒ぎを起こす事がいままであつたの。みんなの心配はそれかもね」

「便乗か・・・大きな戦争があればそのぶん町に向かう兵士は少なくなるからなあ」

「そうゆうこと。あ！早く行かないと閉まっちゃうかもよ？」

「ソウデシタネ」

2人は急ぎ足で染めた店「エンジェルリング」へ急いだ

大通りを右に入ると目当ての店が見えた　女の子が外の様子を伺っていた

「こんにちは　昨日はどうもです」

「あ、いらっしやいませー。こちらこそありがとうございました」

昨日と同じようなやさしい笑顔でお辞儀をしてくれた

「すつごく悪いんですけど・・・髪を黒く染めたいんです・・・」

「そうですか・・・力作だったんですけど・・・分かりました。」

「どうぞ」と店の中へ案内され 中へと消えていく

染め方はとてもシンプルで 必要な所に液体を塗り10分放置して  
洗い流すだけであつた

「おまたせゝあれ?・・・いたいた」

アイラは店向かいにあるテラスで紅茶のようなものを飲んで待つて  
いた

「ごめんね 暇だったからお茶してたの」

「うっん、こっちこそ待たせてごめん」

アイラの向かいに座り 店員に同じ物を頼む

「やっぱり黒のほうが似合うよ 浩介君はね」

「そう? んじゃ2度と染めないようにしよつと」

浩介は「君もすごく似合っているよ まるで女神のようだ」を言う  
か悩んでいた

今朝のトラウマを何とか記憶から消し いざ、言おうと口を開いた  
とき

「ねえ浩介君」

「は・・・はい！なんでしょう！」

アイラに阻まれてしまった　しかし言わなくて正解だっただろう

「私・・・やっぱり戦う・・・ううん、最初から決めていたのかもしれない」

「そうか・・・理由、聞いていい？」

浩介も戦うと決めてはいた　が、理由がハッキリしなかったのだ

「私ね、インガクス国出身なの・・・」

衝撃だった　亡命者がいるとは前に聞いたことがあった　アイラもその１人だった

「え・・・亡命・・・」

「そう・・・シアンしか知らない事なんだけどね」

アイラは目を瞑り　昔の事を思い出す　手が震えていた

「インガクス国はね、強い者だけが生き残れる。そんな国で私達家族はがんばって生きてきた。お父様はすごく強くてね、国王候補まで名前が挙がっていたの。」

浩介は黙ってアイラの話に耳を傾ける

「お母様はいつも言っていた、お父様のおかげで生きていけるんだって。がんばって支えようって。私が１０歳の頃、国王が怪我による病で倒れてしまった。戦えない国王なんかいらぬ、殺せって国中から罵せられてた。そこでお父様が国民に言ったの。いままでが

んばって戦ってきた国王になんて事を言うつてね、その次の日の朝、お父様の部屋に行ったら亡くなっていた・・・」

「覚えているのは血だらけのお父様の部屋だけだった。気が付いたらユースウエル第15ベースに居た・・・隣にはお母様がいた・・・手首から血を流して・・・」

耐え切れなくなってアイラは涙をこぼした

浩介はアイラの手を握っていた　かける言葉は見つからなかった

「ごめんね・・・また泣いちゃった・・・泣かないって思えば思うほどでちゃう・・・」

「好きなだけ泣いていいよ　いつまでも待つから」

「ありがとう・・・」

アイラは泣いた　大声で泣いた　この先の分まで泣こうと　涙を枯らそうと

自室、といっても昨日騒ぎまくった部屋だが　そこでのんびりしている2人がいた  
1度健人と話をしたかったが忙しいらしく　14時からの30分しか時間が取れないと言われ  
それまでのんびりすることとなった

「あ！しまった！！」

突然大きな声で俊介は肝心なことを思い出した

「うるさいなーなんなの？」

「銃！バレットないけどいいの！？」

「あ、いけね 忘れてた。俊介はアレじゃないとダメだもんねえ  
私は同じ物ならいいけど」

「今日集合なのに・・・間に合わないよなあ？」

「さすがに・・・ねえ？」

時計を見ると12時をまわっていた

「でも、今日集まるだけだし1週間くらいは合同練習かなんかある  
だろうし 間に合うでしょ」

「かなあ？どっちにしても持ってきてもらうしかないさそうだなあ」

扉をノックする音と共に若い兵が入ってきた リッキーだ

「失礼します！」

「お、丁度いいとこにきたリッキー君よ。ちょっと聞きたいんだけど」

「なんでしょうか！」

「第2エリアに連絡つてできないかな？愛銃が必要になっちゃってさ 持ってきてないんだ」

「大丈夫です！夜には届くようになっていきます！」

「ええ！早いな！！俺達が着いてない時にすでに誰かが向かってくれたのか・・・」

「俊介殿は知らないようなので説明をさせていただきます！数は少ないですが馬がいるのです。急ぎの場合は使われるのです。ここから第2エリアならば丸1日で着くと思います」

「へえくんじゃ往復2日かぁ・・・さてよ？昨日返事した後すぐに出しても間に合わないんじゃない？」

「きつとケントさんだねえくんたぶん4人分の装備運んできてるよ」

「あの人・・・志願すること想定してたのか・・・まったく・・・あ、リッキー君 用事があつたんじゃない？」

「そうでした！忘れていました申し訳ありません！先ほど第2エリアから2名本部に到着されたようです！」

リッキーは頭を下げ 用事を伝えた

「おろ 誰が呼ばれたんだろ・・・リッキー、名前はわからない？」

「自分に伝えられたのは人数しか・・・」



「んー 連れてきてもらえる？」

「了解しました！失礼しました！」

リッキーは敬礼をして部屋をあとにした

「誰が来たんだろうな」

「さあ？物好きがいるもんだなあ」

「そんな物好きがすでに2人ここにいるけど？」

「一々うるさいなあーそんな奴には・・・こうだー!!」

シアンはすばやく俊介の後ろに回りこみ、首に腕を回しヘッドロックを決める

「うお・・・い・・・息が・・・」

タップしても離してくれないのは分かっていた だから・・・落ちた。  
。。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・くん」

「俊介くん 起きて〜」

目を開けるとそこには赤い髪を揺らして覗き込む女の子がいた

「シアンこの・・・あれ？ルナがなんでここに!？」

体を起こす どうやらベッドに寝かされていたみたいだ  
椅子には見たことある顔を見つけることが出来た

「ポールさんも!」

「俊介、寝ぼけてるのぉ？第2エリアから2人来たっていったじやん」

「あ、そーいえば・・・って元々シアンが!!」

「あはは 相変わらずだね〜 アイラさんと浩介君は？」

ルナは俊介の隣に座った

「今町に行ってるよ。浩介の頭直しに」

「あらら、少しおかしいと思ってたら病気だったんだ・・・」

ルナは深刻な顔つきで心配する 俊介は間違ってる事が分かったが、  
あえて乗ることにした

「ああ・・・とても残念だよ・・・結構あぶない治療でな・・・成功は3割だそうだ・・・」

「えええー!こんな所においていいの？行かなくて!!」

「ああ、アイラがついているから・・・いまはそつとして置いた方がいいんだ・・・」

「そう・・・」

ガチャ

「ただいまーってアレ？」

「浩介君！？よく無事で・・・」

ルナは涙ぐんで浩介を抱きしめた

「ちょ・・・え？なにこの嬉しい状況」

「まあなんていうか・・・ありがとう だろ？」

「ああ、なんかしらんけどありがとう！」

その後、ルナに真実が告げられて俊介は再び眠りに就くこととなった

## 第11話：仲間と過去（後書き）

次話も1週間くらいかかりそうです。遅くてすみません……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1552f/>

---

Absolute Wall-絶対の壁-

2010年10月10日03時35分発行